

巻頭言

このレポート集は、明治大学文学部史学地理学科西洋史学専攻の基礎演習ゼミで、各受講生が各々興味をもつ内容を記述したレポート集である。このクラスは去年と比べても人数が多く、互いに情報を共有し助け合いながら比較的明るい雰囲気ですべての授業を乗り切っていたように思える。授業前の談笑やたまに開催される食事会が、課題の多いこの授業を楽しいものにしてくれた。

ゼミとはどのようなものなのか、またその授業内容も未知のまま基礎演習クラスは始まり、金澤先生は入学して間もない私たちに最初の授業でひとりひとり自己紹介をさせた。この自己紹介は、後々事あるごとに急に私たちに課せられたが、これによって自分の言いたいことを相手に伝える技術や、大事なことを特に印象付ける話し方などを身に着けることが出来た。そして授業の最後にはさっそく、次の授業までに一冊の本を手に入れ読んでくれることと、受講生のうち二人には本の内容をまとめてレジュメを作ることが課題として出された。文字のポイントやフォント、書式が全く分からず苦労したが、この苦労こそが私たちが一年間で学んだことのなかで最重要のように思える。とにかくわからなくても挑戦してみる事、そうしてはじめて先生から答えやヒントをもらう。そういったことの繰り返しから、将来社会に出てからの常識やマナーを理解するようになった。

授業は毎回、課題の本や各自のレポートについての発表とそれに対する質問や感想という対話形式で進められた。本を読む時間の確保やスケジュール管理はもちろん、発表を聞き疑問点や気になった個所をディスカッションしていくことは思ったよりも難しく、物事のなかに何か疑問を見つけ、自分が感じたことを言葉にする、これらを普段から実践するべきだと実感した。このディスカッションによって自分では気付かなかったことに気付いたり、多角的な考え方ができるようになった。

現在の私たちは、入学当初と比べればスピーチ力は上がり発表も少しづつだが臆せず行えるようになり、様々なことが出来るようになったといえる。同じように学年が上がってからや卒業時に、このレポート集を読み返して自己の成長を感じられたら幸いだ。最後に、毎回ユーモア溢れるお話をしていただき、時に褒めて、時に厳しく私たちに伸ばして下さった担当講師金澤宏明先生に感謝を申し上げて、巻頭言とする。

2014年1月12日

基礎演習（西洋史）金澤クラス

演習長 梶原 夏実

目次

・ 巻頭言	1
・ 池田安那 ハプスブルク帝国崩壊を招いたナショナリズムの拡大	5
・ 井手優作 ナポレオン帝国崩壊の要因 ——「大陸封鎖」とスペイン反乱——	11
・ 後澤陽子 第一次ロシア革命 ——その前夜から勃発まで——	15
・ 梶原夏実 西部開拓とアメリカ人の国民性の形成	19
・ 金子俊太郎 米ソ宇宙開発競争の開始と I C B M	23
・ 木村悦生 ドイツ第三帝国の破滅 ——幻想神話への抵抗——	27
・ 佐藤聡太 別角度から見たホロコースト	31
・ 篠塚理沙 中世イタリア都市におけるソシアビリテの性質と機能 ——ヴェネツィアの「カーニヴァル」を例に——	35
・ 末兼侑佳 ジャガイモ飢饉の成り行きと誤ったレッセフェールの使用法	41
・ 高田匠唯 フランス革命とロマン主義の関係性	47

・ 田渕由利恵	
スペインの征服によるマヤ文明の文化変容と崩壊	51
・ 寺門侑樹	
創り上げられたヒトラーの人気	55
・ 藤根琢也	
ビザンツ帝国が欧州世界で果たした歴史的役割	59
・ このレポート集をお読み頂いた方に	65

ハプスブルク帝国崩壊を招いたナショナリズムの拡大

池田 安那

1848年にフランスで起きた二月革命はヨーロッパ各地に波及し、ヨーロッパ各地で自由主義・国民主義運動が高揚するにつれて、民族独立の機運が高まっていった。一大帝国を築き上げたハプスブルク帝国もこの歴史の荒波に飲まれ、衰退の一途を辿ることになる。本レポートでは国内におけるナショナリズムの拡大がハプスブルク帝国崩壊の起因となったと仮定し、二月革命前後の国内情勢とアウスグライヒ体制に触れながら、二月革命勃発後、ナショナリズムが国内の人々に浸透し、民族運動へと拡大していった過程を考察する。

ハプスブルク帝国は多民族国家であることに大きな特徴がある。ハプスブルク帝国は領邦の集合体であって、単一の国家ではなく、その領土はヨーロッパ各地に点在しており、領域内の人種も言語も異なっていた。加えて、制度は領邦ごとに異なり、地方貴族が政治権力を握っていた¹。しかし、18世紀半ば以降、マリア・テレジアとヨーゼフ2世によって中央集権化が推し進められ、この改革事業は従来の地方貴族の特権を脅かした。マリア・テレジアはウィーンに中央政庁を確立し、それにより新しい階級が誕生した。それが官僚である。官僚制の発達は貴族による地方行政の独占を阻止した。こうしたことから、貴族らは彼らの伝統的な特権を維持するため、ハプスブルク帝国に対抗した。しかし、彼らは婚姻や裁判などを宮廷内で行い、帝国の行政を握っていた。彼らの存立は帝国の下で成立しているため、帝国の崩壊は彼らの従来の生活や特権を脅かすことになる。そのため彼らはそれ以上の抵抗はできなかった。一方で、官僚たちは啓蒙主義による統一国家の建設を理想に掲げていた。彼らはドイツ語を使用したため、自動的にドイツ語の普及に貢献することになり、彼らの多くは都市で暮らしていたため、ハプスブルク帝国の諸都市はドイツ的性格を帯びることになった。時を同じくして、地方から農民の子息たちが都市に移り住んだ。彼らはドイツの技術を学び、ドイツ語を話した。こうして都市では商業が発達し、ドイツ文化が開花した²。

その後1848年に革命が勃発し、農民解放が実現すると、農民を拘束していた賦役が廃止された³。伝統的な生活様式もまた、フランス革命で浸透した革命思想によって解体された。こうして法的な束縛から解放され自由の身となった農民が流入することで、都市は田舎の民族性を取り込むことになった。こうした人口増加と多様性を取り込んだ都市部の成長は、経済の発展を促した。こうした状況下でハプスブルク帝国に対する経済的・政治的自由の要求が生まれ、

¹ ルートヴィヒ・アルムブルスター、コーネル・ツェーリック編『大ハプスブルク帝国 その光と影』（南窓社、1994年）、11頁。

² A・J・P・テイラー、倉田稔訳『ハプスブルク帝国 1809-1918 オーストリア帝国とオーストリア＝ハンガリーの歴史』（筑摩書房、1987年）、26頁。

³ 大津留厚、水野博子、河野淳、岩崎周一編『ハプスブルク史研究入門 歴史のラビリンスへの招待』（昭和堂、2013年）、122頁。

領邦内の諸民族は自治・独立を目指して反抗運動を開始した。ドイツ人が専制的に支配するハプスブルク帝国の国家体制は、諸民族の間に民族意識を芽生えさせたのだった。

二月革命はヨーロッパ各地に伝播し、ハプスブルク帝国内にもその革命思想が浸透していった。こうした状況下で民族主義者であるコシュートが民族の独立を求めてペシュトで武装蜂起した。このことを機にフェルディナントはハンガリー自治政府の樹立を承認し、政府も彼らの要求が国法で認められた領邦の自治権の延長にある限り、合法であることを保障した。しかしながら、政府の容認にもかかわらず、軍は帝国各地で起きる民族運動を武力で制圧し、自治政府の打倒をはかっていた。

三月革命でフェルディナントが退位し、甥のフランツ・ヨーゼフが皇帝に即位した。フェルディナントの退位により、皇帝の後ろ盾を失ったハンガリーはハプスブルク帝国の反逆者とみなされるようになった。ハンガリーは民族独立を目指して抵抗するも、帝国はロシアの援助を得てこれを制圧した。フランツ・ヨーゼフはプラグマーティシェ・ザクツィオーンの規定に則ってハプスブルク諸領邦君主の地位を継承するも、諸領邦側は三月革命で再確認された領邦の自治権の侵害であると主張し、両者の間で認識の祖語が生じてしまう。さらに、帝国は対イタリア戦争と対プロイセン戦争で連敗を重ね、国家存亡の危機に直面していた。そのため国内の再編に着手せざるを得なくなっていた。帝国は新体制へと移行する変革の時期に来ていたのだった⁴。

また一方で、国内では三月革命の直後、単一国家ではなく、諸民族の自治を原則とする連邦国家の建設を目指す動きが広まっていた。連邦国家とは、各領邦がそれぞれ領邦内の内政を受け持ち、独自の法律を作って運営し、国全体に関わる軍事や外交は全国議会と中央政府が担当する君主的連邦のことである。同連邦下では諸民族は皆対等とされ、各自の民族文化の発展と活性化を理想に掲げていた。そして1849年のクレムジールの国民議会では、「平等」と「連邦主義」に基づいた新しいオーストリア国家の樹立を規定した憲法草案が作成されるにいたったのである。

帝国はハンガリーとの祖語を解消し、アウスグライヒを採用することで国家存亡の危機を乗り越えようとした。しかし、この和協は連邦主義や諸民族の平等の点で矛盾を抱えており、結果的に民族の分断をも招いてしまう。アウスグライヒは国事勅書をもとにハンガリー王国の自治権を保障すると共に、帝国の安全保障に関わる外交や軍事を「一体不可分」の帝国の業務として共通の政策をとることを明文化したが、他の領邦ではハンガリー王国と同様の領邦自治の再確認が行われなかった。この体制下ではオーストリアとハンガリーは自立した政府を持つハプスブルク家の当主が皇帝とハンガリー王国国王を兼ねており、両国の全国議会と中央政府が領邦議会と統治機構の上位権力として機能していた。また、ハンガリー政府は相対的に多数を占めたマジャール人たちの民族的権利を優先し、諸民族に対して厳しいマジャール民族国家政策を押し付け、彼らを抑圧した。このことでハンガリーの権限は増すことになったが、スラヴ系諸民族やルーマニア人の熱望は無視され、諸民族の反感を買うことになったのである。またそれと同時にハンガリーの権限が増すことになった。

こうした政治体制の変容を受けて、ナショナリズムの帝国各地への流布と、浸透を考察する。

⁴ 大津留厚『ハプスブルクの実験 多文化共存を目指して』（春風社、2007年）、25頁。

ここでは、言語がナショナリズム運動の拡大に重要な役割を担っていたことに注目したい。18世紀にマリア・テレジアの近代化政策の一環として教育政策が開始された。同政策は、国家権力のもとで子どもたちの教育を管理運営し、帝国内の全ての子どもたちに母語による初等教育を義務付けた。初等教育は、地域的な格差を伴いながらも急速に普及し、民族主義形成を促した。また、初等教育を担った教区教会は原則的に教区民の言葉で教育を行ったため、それぞれの言語の識字率が向上した。教区教会はナショナルなアイデンティティの普及とネーションの形成の上で重要な役割を果たしたのである。しかし、開放的なネーションという考え方は、異民族の侵略や同化の脅威を守る排他的なナショナリズムを掲げる防衛教会によって徐々に塗り替えられていった。こうしてナショナリズム運動は各地の防衛協会に支えられながら、人々の生活に浸透していった。

教育政策と並んで民族語の普及に貢献したのは、啓蒙主義とドイツ・ロマン主義に影響を受けた貴族知識人たちだった⁵。彼らは、表現力に乏しく語彙数の少ない貧弱な民族語の改善に努めた。彼らの尽力によって言語は都市の市民階級に浸透していき、民族語を通して教育や文化が幅広い階層に浸透していった。また、経済の順調な発展、都市化、識字率の向上は市民文化の発展を促した。識字率の向上による市民文化の発展は、各々の言語による一つの文化空間を作り出そうとする意識を人々に芽生えさせた。それに伴い、民族的空間の拡大を目指す政治的な欲求が生まれると、国民国家の形成を目指す政治運動へと変化していった⁶。

近代社会の幕開けと共に、従来の中央集権的かつ圧政的な政治体制では言語も風習も異なる多民族を統治するのは困難になっていった。皇帝への忠誠を基軸に置いていた帝国は、近代社会へと移行していたのにもかかわらず時代に同調せず、その基本方針を変更しなかった。帝国は時代に応じた独自の明確な帝国の概念を作り、単一国家ではなく諸民族の自治を原則とする連邦国家を作る必要があったのだ。帝国は一つの民族に深く肩入れすることなく、国内の民族問題に平等に対処して国内の改革に専念する必要があったが現実問題を直視せず、解決しようと試みなかった。そのため、帝国は領邦内の多民族と協調をはかろうと、自由な民族国家の連邦に再編成することで存続を試みるが、その場しのぎの弥縫策に終わってしまう。また、アウスグライヒによって帝国内の民族の権利を認めたがために、民族の論理による社会の分断を後押しする結果を招いてしまう。結果として帝国は第一次世界大戦を迎え、総力戦の末にあっけなく崩壊してしまった。600年に及ぶハプスブルクの高圧的な支配によって領邦内の民族の怒りや不満は頂点に達しており、1848年の革命を機に鬱積した不満が爆発したのであった。人民主権の時代への移行が、ハプスブルク帝国の崩壊を促したのである。

⁵ 大津留、水野、河野、岩崎、160頁。

⁶ 大津留、水野、河野、岩崎、165頁。

【参考文献】

1. ルートヴィヒ・アルムブルスター、コーネル・ツェーリック編『大ハプスブルク帝国 その光と影』（南窓社、1994年）
2. アラン・スケッド、鈴木淑子、別宮貞徳訳『図説 ハプスブルク帝国衰亡史 千年王国の光と影』（原書房、1996年）
3. A・J・P・テイラー、倉田稔訳『ハプスブルク帝国 1809-1918 オーストリア帝国とオーストリア＝ハンガリーの歴史』（筑摩書房、1987年）
4. 江村洋『ハプスブルク家』（講談社、1990年）
5. 大津留厚『ハプスブルクの実験 多文化共存を目指して』（春風社、2007年）
6. 大津留厚、水野博子、河野淳、岩崎周一編『ハプスブルク史研究入門 歴史のラビリンスへの招待』（昭和堂、2013年）

A : 今年度、実際に参照したもの

1. ルートヴィヒ・アルムブルスター、コーネル・ツェーリック編『大ハプスブルク帝国 その光と影』（南窓社、1994年）
2. アラン・スケッド、鈴木淑子、別宮貞徳訳『図説 ハプスブルク帝国衰亡史 千年王国の光と影』（原書房、1996年）
3. A・J・P・テイラー、倉田稔訳『ハプスブルク帝国 1809-1918 オーストリア帝国とオーストリア＝ハンガリーの歴史』（筑摩書房、1987年）
4. 江村洋『ハプスブルク家』（講談社、1990年）
5. 大津留厚『ハプスブルクの実験 多文化共存を目指して』（春風社、2007年）
6. 大津留厚、水野博子、河野淳、岩崎周一編『ハプスブルク史研究入門 歴史のラビリンスへの招待』（昭和堂、2013年）

B : 今後、参照予定のもの

1. ハンス・コーン、稲野強訳『ハプスブルク帝国史入門』（恒文社、1982年）
2. ゲオルク・シュタットミュラー、丹後杏一訳『ハプスブルク史研究入門 ——歴史のラビリンスへの招待』（昭和堂、2013年）
3. 江村洋『ハプスブルク家史話』（東洋書林、2004年）
4. 江村洋『マリア・テレジアとその時代』（東京書籍、1992年）
5. 菊地良生『ハプスブルク家の光芒』（ちくま文庫、2009年）
6. 菊池良生『検閲帝国ハプスブルク』（河出書房新書、2013年）
7. 南塚信吾『ドナウ・ヨーロッパ史』（山川出版社、1999年）
8. 矢田俊隆『ハプスブルク帝国史研究 ——中欧多民族国家の解体過程』（岩波書店、1977年）

ナポレオン帝国崩壊の要因

——「大陸封鎖」とスペイン反乱

井手 優作

ナポレオン・ボナパルトは国内危機、反フランス同盟軍の反撃、フランス国内の指揮を失っていた総裁政府期のフランスにエジプトから帰国の際には国民からの熱烈な歓迎を受けていた。他にも、送還されたエルバ島から脱出し、再びテュイルリー宮殿の主となってパリに進撃したが、この進撃に対しても民衆の熱狂的歓迎があったと言われる。だがこれほどの支持を受けていたナポレオンが最終的にはセントヘレナ島までとばされることとなった。ナポレオン帝国が崩れていった大きな要因とされるスペインの反乱、それとナポレオンの対外政策である「大陸封鎖」の関連性に注目し崩壊の真相を検証する。

「大陸封鎖」は、デュフレスの表現によると「大陸封鎖とは、フランスで既に行われていたイギリス商工業に対する措置を、ヨーロッパに強制的に実施させるために、ナポレオンがとった政治的・軍事的・外交的・経済的諸政策の全体として定義されねばならず」¹とされるものである。そもそも「大陸封鎖」はもともとロマノフ朝第9代皇帝パーヴェルとともに海洋の自由を守ろうとした統領政府の計画であった。その計画が作られた原因として当時のイギリスのあらゆる海洋上での独占状態の行使、例えば海の警察力である臨検権、これによって全世界の交易を取り調べる権利を手にしてきた。だが1801年にロシア皇帝パーヴェルが死にこの計画は水と消えてしまった²。ナポレオンはフランス革命期の保護主義政策を受け継いでいた、それはフランス国内でのイギリス商品の締め出し、そしてフランス商品の世界の市場へ促すことを意味した。これを受け継いでいた事が関係して、水と消えた計画がナポレオンの手によって覆され、「大陸封鎖」という形になり登場した。「大陸封鎖」はナポレオン帝政下の1806年11月21日の「ベルリン勅令」により宣言され、翌1807年12月17日の「ミラノ勅令」で完成された。ナポレオンはイギリスの船舶があちこちに運んでいた植民地の高価な食料品や安価な暖かい衣服をヨーロッパ大陸の全土から締め出し、イギリスの商品をどこであろうと燃やすよう命令した。このためパリではコーヒーの代わりにレモン水や紅茶に卵黄、牛乳、キルシュなどを加えた飲み物であるババロワズしか出なくなった。他にもフランスの庶民の女たちは、半裸の子供たちと一緒にあって、イギリスの織物が燃える山のまわりにひざまずき「お願い！ どうせなら私たちにちょうだい！」と言っていた³。結果的にナポレオンが行なった「大陸封鎖」はイギリスに多少のダメージを与えたが、フランス国内にもおおきなダメージがあったとされ

¹ 小宮正弘「ナポレオン帝国衰亡史における『大陸封鎖』の位置」『静岡産業大学国際情報学部研究紀要』7（2005年）、191-204頁。

² ジュール・ミシュレ、大野一道、坂本さやか、西願広望、平正人、竹村厚士、立川孝一、ボアグリオ治子、山中聡訳『フランス史VI——19世紀 ナポレオンの世紀——』（藤原書店、2011年）、454-455頁。

³ ミシュレ他、454-457頁。

る。そんな「大陸封鎖」がスペイン反乱とどう関わってくるのか次章説明する。

次いでナポレオン帝国の崩壊への道筋を検討する。ここでは 1804 年にナポレオンの戴冠式が行われたあとのフランスの国境外の地域におけるナポレオン支配をナポレオン帝国と呼ぶが、1804 年の時点ですでにピエモンテ地方の六県やジェノヴァ港のあるリーグレ共和国など計 104 県を抱えるまで拡大していた。こうした大帝国内も、スペイン反乱を景気に崩壊へと向かう。アランフェス事件と呼ばれるマドリード南の離宮地でフェルディナンド皇太子を掲げた民衆蜂起を契機にナポレオンはスペインの王位篡奪とスペイン征服の意志を明らかにした。この目的はイギリスにとっての密輸基地、船団基地、格好の投資先であり、「ベルリン勅令」発布後も経済関係を続けていたポルトガルをイギリスから奪い、スペイン沿岸をフランスの支配下に置くことが出来るからである⁴。しかし、この征服は戦争ではなく買収によって王位を篡奪し、その後スペインすべてを領有しようとしたのである。1807 年 5 月 25 日にナポレオンはスペイン国民に向け「スペイン人の皆さん、長い臨終のあとあなたがたの国家は死滅した。私はあなたがたの病気を見てきた。私はその治療を行うだろう」⁵と宣言して、スペイン王位が委譲されたこと、王政の刷新、諸制度の改革などの意志を表明した。ナポレオンはスペイン支配を成功したものとして確信していたが、スペイン国民はナポレオンに敵意を持っていた。この時すでに抵抗運動がスペインで広まっていたのである。それは次第に大きくなり、ついに 1808 年 5 月 2 日にマドリードで大規模な反乱が起きた。この反乱での推定死者数はスペイン人が 800 人、フランス人が 400 人だとされる。翌日にはフランス軍によって鎮圧させられた。『5 月 3 日』画家のゴヤが書いたこの絵は有名であろう。だが、ナポレオンが直接軍事介入をしたのは、7 月下旬にデュボン將軍率いる兵力 2 万のフランス軍がスペイン軍に降伏したバイレンの敗北と、8 月早々のイギリス軍のポルトガル上陸、スペイン侵略以降である。ナポレオンの直接介入したことが遅いことからわかるように、スペインの状態を良く知らなく、国の地形も十分理解していなかったようである。そのことも関わってナポレオンのスペイン戦争は大きな成果もなく、見通しもなかった。それをあらわしているように彼はスペインを離れる数日前の 1809 年 1 月 14 日に、「私が莫大な出費を余儀なくされていることを考えてみてくれ。スペインは高くつく。しかも私に何ももたらしてくれないのだ」とライン派遣軍司令官ダヴー元師に送った⁶。結局スペイン側の勝利となり、スペインはナポレオン帝国の癌と言われるほど、イベリア半島以外の国でもフランスに対して反乱を起こすようになった。その例として今までフランスにいいようにやられていたオーストリアが目覚まして 1809 年にフランスと戦った。このオーストリアの反乱はフランスにとって非常に重大な傷となった。なぜならば、オーストリアとはティルジット講和を結んでいたためである。このティルジット条約とは 1807 年 7 月 7 日にロシア・フランス間、9 日にフランス・プロイセン間でのナポレオンとロシア皇帝アレクサンドル 1 世の秘密条約であり、イギリスとの断交、当時中立国であったオーストリア、デンマーク、スウェーデン、ポルトガルの「大陸封鎖」参加を強制させることを決定させたものである。このスペイン反乱によりティルジット条約は消滅し、再びオーストリア、プロイセンが反仏体制を取

⁴ 本池立『ナポレオン 革命と戦争』（世界書院、1992 年）、128 頁。

⁵ 本池、129 頁。

⁶ 本池、132 頁。

りはじめ、フランスにとって強力な敵となったのである⁷。

ナポレオンの支配は征服地の拡大に従って、次第に重苦しい専制主義の形態をとるようになり、諸民族を保護するのではなく圧殺する軍事独裁になっていたのである。ポーランドの軍人であるコシューシコはナポレオンに対して「皇帝は自己のことしか考えていない、彼はあらゆる偉大な国民性、それにまして独立精神を嫌悪しているのだ。かれは暴君だ」とも公言している⁸。鎮圧しなかったスペインの反乱を機に反乱は多くなった。つまり「大陸封鎖」の事実上の消滅。そのことによりイギリスが孤立していた時の味方国であるオーストリア、プロイセンなどが再び反仏体制になったことでイギリスの孤立化が出来なくなってしまった。「大陸封鎖」を無視しイギリスに接近したロシアに対する大遠征の失敗はナポレオン帝国が崩壊する象徴である。これらの引き金となったイベリア半島問題はナポレオン帝国史上、最大の失態なのである。だとするとスペイン反乱は鎮圧させられていたら違う結末になっていたかもしれないほどナポレオン帝国崩壊のおおきな要因になったと言えるのではないか。

【参考文献】

1. ジェフリー・エリス、杉本淑彦、中山俊訳『ナポレオン帝国』（岩波書店、2008年）
2. アンリ・カルヴェ、井上幸治訳『改訳 ナポレオン』（白水社、2004年）
3. ローラン・ジョフラン、渡辺格訳『ナポレオンの戦役』（中央公論新社、2011年）
4. ジュール・ミシュレ、大野一道、坂本さやか、西願広望、平正人、竹村厚士、立川孝一、ボアグリオ治子、山中聡訳『フランス史 VI ——19世紀 ナポレオンの世紀——』（藤原書店、2011年）
5. 小宮正弘「ナポレオン帝国衰亡史における『大陸封鎖』の位置」『静岡産業大学国際情報学部研究紀要』7（2005年）、191-204頁。
6. 本池立『ナポレオン 革命と戦争』（世界書院、1992年）

⁷ 小宮、191-204頁。

⁸ アンリ・カルヴェ、井上幸治訳『改訳 ナポレオン』（白水社、2004年）、96頁。

A : 今年度、実際に参照したもの

1. ジェフリー・エリス、杉本淑彦、中山俊訳『ナポレオン帝国』（岩波書店、2008年）
2. アンリ・カルヴェ、井上幸治訳『改訳 ナポレオン』（白水社、2004年）ジェフリー・エリス、杉本淑彦、中山俊訳『ナポレオン帝国』（岩波書店、2008年）
3. ローラン・ジョフラン、渡辺格訳『ナポレオンの戦役』（中央公論新社、2011年）
4. ジュール・ミシュレ、大野一道、坂本さやか、西願広望、平正人、竹村厚士、立川孝一、ポアグリオ治子、山中聡訳『フランス史 VI ——19世紀 ナポレオンの世紀——』（藤原書店、2011年）
5. 小宮正弘「ナポレオン帝国衰亡史における『大陸封鎖』の位置」『静岡産業大学国際情報学部研究紀要』7（2005年）、191-204頁。
6. 本池立『ナポレオン 革命と戦争』（世界書院、1992年）

B : 今後、参照予定のもの

1. クリストフ・クレスマン、石田勇治、木戸衛一訳『戦後ドイツ史 1945-1995 ——二重の帝国——』（未来社、1995年）
2. メアリー・フルブック、芝健介訳『二つのドイツ 1945-1990』（岩波書店、2009年）
3. 石田勇治『過去の克服 ヒトラー後のドイツ』（白水社、2002年）
4. 永井清彦『現代史ベルリン 増補』（朝日新聞社、1990年）
5. 若尾祐司、井上茂子『近代ドイツの歴史 ——18世紀から現代まで——』（ミネルヴァ書房、2006年）

第一次ロシア革命

——その前夜から勃発まで——

後澤 陽子

ロシアはかつて世界の陸地の大部分に渡って強大な帝国を築いたが、それは 1905 年から始まった一連の革命により終焉した。大国ロシアで全く異なった政治体制を形成した革命が起こった原因を、当時の民衆の様子から考察する。というのも、民衆に焦点をあてて当時のロシアの情勢を分析すればロシア帝国の崩壊を招いた原因が明らかになるからである。本レポートはこの目的に沿って、第一次ロシア革命前の情勢から革命勃発までを対象とする。

クリミア戦争（1853-56 年）での敗北は、ロシア帝国に後進性を自覚させることとなった。当時、ロシアでは重工業があまり発達しておらず、運輸の要となる鉄道もなかったため戦場では物資が不足し、十分な武器もなかった。先に工業化したイギリスやフランスは経済的に自立しており、国力が強く、戦争に際して高性能な武器を十分な量で用意することが可能であった。例えば、英仏海軍は蒸気船を主力にしていたのに対し、ロシア軍は帆船を使用していた。それに加えて、ロシアの兵隊は農奴から徴兵しており、25 年間もの長期にわたる軍役に課されていたゆえに、農奴からの不満が強かった。クリミア戦争終結後に即位したアレクサンドル 2 世はこれらの事態を鑑みて、1861 年に農奴解放令を發布し、さらには工業化を推進するため国民意識の形成を目指した。しかし、農奴解放は旧領主にとって有利な方法で進められたため、農奴は有償で土地を得てその代金は国家が肩代わりし、49 年賦で返済を余儀なくされた。返済保障のため、村落ごとの村団にまとめられ、それらに連帯保証をさせた。農奴は解放されたにもかかわらず、結局は再編成された共同体内部に縛られつづけることとなり、元農奴の地位は依然として低いままであった。それゆえ農民の不満は溜まっていった。しかし、ここで注意すべきことは、それでも農民はツァーリを信じていたことである。「土地は神のもの、ツァーリはすぐに、すべての土地を農民に与えてくださるだろう」といったように、ツァーリはきっと自分たちを助けてくれるが、今助けられないのは官吏が邪魔をしているせいであるなどと考えていた¹。民衆の国民意識の形成については、先ほど述べたようにイギリスやフランスなどの工業力のある国は経済的にも強く自立した国家であった。ロシアも列強の仲間入りをするため国民意識をつくり国力を高めようとした。しかし、ロシア帝国はその頃旧ポーランド・リトアニア大公国の 62%の領土と人口の 50%、フィンランド、三ハン国、ザカフカースを有しており、19 世紀末には大ロシア人は人口の半数に満たない 48%を占めるのみであった²。そうした状況であった上に、帝政ロシアには少数民族問題を一貫して扱うロシア化政策がなかったため、ロシア人としての意識は徹底されず、各地域のロシア化は帝国への不満を積もらせる結果となった。こうした状況を背景に、クリミア戦争後から日露戦争までの間にロシア国内では民衆の不

¹ 和田春樹、細川滋、栗生沢猛夫、土肥恒之、石井規衛、塩川伸明『新版世界各国史 22 ロシア史』（山川出版社、2008 年）、229 頁。

² 土屋好古『「帝国」の黄昏、未完の「国民」』（成文社、2012 年）、26 頁。

満や不安定さが次第に積み重なっていったのである。

19世紀最後になるとロシア帝国は不況に陥る。農民や少数民族内だけでなく、社会の各層で不満がわきあがり、特に最初にそれが表出したのは学生たちであった。1899年、ペテルブルク帝国大学では学生が学長の抑圧的掲示に対して反発し、また警官隊の暴力に抗議してストライキに入った。これらの動きは次第に首都の17の大学や高専へと広がり、全国へと波及していった。政府はこれに対抗し、懲罰としてストライキなどに参加した学生を徴兵すると発表した。1900年にはキエフ帝国大学でこの条例が適応され、ペテルブルクとハリコフの学生がこれに抵抗し、ストライキは全国へ広がっていった。そうした最中、文部大臣ボゴレーポフが学生に狙撃されるなど、活動は政治色が強くなり始める。さらに、1901年にはフィンランドで自治権侵害に対して抗議活動を展開し、翌1902年には南ロシアで農民が地主所領を攻撃して裁判で有罪判決を受ける事態が発生し、内相シピャーギンが政治テロで学生に射殺されている。1903年にはポグロムにより、49人のユダヤ人が殺されたが、事件の裏ではツァーリがこの襲撃を許可したといった噂があった³。国内のこのような状況に加え、1904年、日露戦争が勃発する。国内が危機的状況であったため極東に勢力を割く余裕がなく、ロシアは対外戦争で負けが込んでいた。反政府主義者は反戦を唱え、被支配民族のフィンランドは混乱に乗じてフィンランド総督ボブリコフを暗殺するなど、抵抗運動を始めた。マルクス主義のプレハーノフは敗戦主義をとり、「日本は圧迫された諸民族にかわって復讐しているのだ」と主張した⁴。

このような国内外の問題により疲弊したロシアでは1905年、血の日曜日事件が起こる。血の日曜日事件は1月9日に首都ペテルブルク市内から皇帝の宮殿である冬宮に向けて民衆が行進したことから始まる。聖職者ガポンに率いられて、憲法制定会議の招集や政治的自由、労働時間の短縮、団結権、言論・出版の自由などを求めたもので、ツァーリの肖像やアイコンを掲げた平和的な行進に、家族連れで10万人ほどの民衆が参加していた。しかしながら、その行進に対してロシア軍隊が実力行使を行い、発砲などで100人以上の死者と2000人以上の負傷者をだした。非武装で行進を行ったにもかかわらず、大勢の死者を出した出来事により、皇帝への信頼は失墜した⁵。こうした民衆の抗議活動は各地に広まり、帝国軍内部でも黒海艦隊ポチョムキン号で水兵が反乱を起こした。ロシア史家の原暉之が「第一次ロシア革命の兵士運動でとりわけ顕著な役割を演じたのは水兵である」と指摘しているように⁶、このポチョムキン号水兵反乱以降、ロシアでは民衆による社会的行動が増えていく。中央農業地帯とヴォルガ川沿岸流域では借地料引き下げ、報酬の引き上げを求める運動が生じ、モスクワ農業協会では全ロシア農民同盟設立大会が開かれ、土地所有の廃止、憲法制定議会の招集などを求めた。ポーランド、ザカフカース、バルト海沿岸では民族自治や憲法制定議会の招集を求め民族運動が広まった。これらの運動に対して、帝国政府は皇帝臨席のもと協議会を開き、大臣評議会を検討した。それに基づき、国家ドゥーマが開かれることになった。国家ドゥーマとは諮問国会であり、ドゥーマで検討された法案が国家評議会ですらに検討され、皇帝に提出されるとした。しかし、

³ 和田、253-255頁。

⁴ 和田、259頁

⁵ 木村英亮『ソ連の歴史』（山川出版社、1991年）、26、27頁。

⁶ 原暉之『ロシア史研究 第一次ロシア革命における兵士運動』『ロシア史研究』18（1972年）、18-27頁。

選挙権を制限したものであったので国民は納得せず、事態は収拾できなかった。そのため、ロシアは日本と講和し、戦争を終結しようとした。交渉は難航したが、ロシア代表のウィッテは皇帝の反対にもかかわらず、南サハリンを日本に割譲することで講和を締結した。ロシア軍部には不満が残り、皇帝もこの結果には満足していなかった。戦争は終結したが国内は荒れたままだった。

農村では地主地を焼き討ちにする計画が始まり、地主を追い出すことに村団が動き始めた。モスクワでは印刷工のストライキが学生と結びつき、政治的な性格を持ち始めた。そのような中で、労働者委員会はペテルブルク労働者代表ソヴィエトと名乗り始め、ここで後の革命で中核的な指導者となるトロツキーが活動家として登場する。この運動は全国へ波及し、混乱はさらに大きくなっていく。講和を終えて帰国したウィッテは市民的自由と国会開設を約束することで事態の収拾を図った。皇帝はこれを受け、「十月勅書」として良心・言論・集会・結社の自由を認め、国家ドゥーマの選挙法を改めより多くの国民が参政可能とし、国家ドゥーマ自体を国会とすることを発表した。大方の国民はこれに満足し、労働者ソヴィエトなどを除いて第一次ロシア革命は一応の収束をみせた。

第一次ロシア革命の勃発前から収束するまでをみてきたが、民衆の不満が各地で抵抗運動となり全国に波及した結果、革命は政府を動かすまでに至ったと考えられる。また、大陸に渡って広く領土を抱えていたため様々な民族が入り混じり、それぞれの民族の権利を主張する運動も革命の拡大に一役かっていた。ロシア帝国は強大な国であったが、その広さが革命の深化に影響を与えていたのである。

【参考文献】

1. 木村英亮『ソ連の歴史』（山川出版社、1991年）
2. 土屋好古『「帝国」の黄昏、未完の「国民」』（成文社、2012年）
3. 原暉之『ロシア史研究 第一次ロシア革命における兵士運動』『ロシア史研究』18（1972年）、18-27頁。
4. 和田春樹、細川滋、栗生沢猛夫、土肥恒之、石井規衛、塩川伸明『新版世界各国史 22 ロシア史』（山川出版社、2008年）

A : 今年度、実際に参照したもの

1. 阿部謹也『刑吏の社会史 中世ヨーロッパの庶民生活』（中公新書、2006年）
2. 木村英亮『ソ連の歴史』（山川出版社、1991年）
3. 土屋好古『「帝国」の黄昏、未完の「国民」』（成文社、2012年）
4. 原暉之「ロシア史研究 第一次ロシア革命における兵士運動」『ロシア史研究』18（1972年）、18-27頁。
5. 和田春樹、細川滋、栗生沢猛夫、土肥恒之、石井規衛、塩川伸明『新版世界各国史 22 ロシア史』（山川出版社、2008年）

B : 今後、参照予定のもの

1. E・H・カー、南塚信吾訳『ロシア革命の考察』（みすず書房、2013年）
2. E・H・カー、塩川伸明訳『ロシア革命 ——レーニンからスターリンへ、1917-1929年』（岩波現代文庫、2000年）
3. アーチャー・ブラウン、下斗米伸夫訳『共産主義の興亡』（中央公論新社、2012年）
4. 石井規衛『文明としてのソ連 初期現代の終焉』（山川出版社、1995年）

西部開拓とアメリカ人の国民性の形成

梶原 夏実

独立戦争後、新生アメリカはイギリス・フランスからの土地譲渡を受けて西部への入植を進め、また 1804 年からの二年間にわたるメリウェザー・ルイスとウィリアム・クラークの探検は北アメリカ大陸の内陸部についての情報を東部にもたらした。これに刺激を受けたアメリカ合衆国民は部移住を開始し、幌馬車に乗って富と豊かさを夢見て西部へと旅立った。彼らはアメリカ東部に留まった仲間とは異なったアイデンティティを備えており、東部の社会とはまた違った社会を発展させたのである。この東部と西部の違いが、アメリカがヨーロッパと異なる部分なのであり、よって西部が最もアメリカ的な部分であるのだといえる。つまり、西へ進んで行く事によって人々が自らアメリカという国家的自意識を育み、そのことが植民地時代の母国イギリスとは別の文化や価値観を発展させる始まりになっているのだ。この結論を論じるために、西方移動の理由、環境の変化による人々の変化、アメリカ人の国民性とフロンティアの関係の三つの観点から考察していきたい。

まず最初に、19 世紀中ごろに合衆国民が精力的に西部開拓を始めた理由を述べる。1785 年、合衆国は土地条例を定めてイギリスから得た西方の広大な領土を国民に売却した。また 1787 年には北西部条例で、ある領地の人口が一定の数に達するとその住民が議会を組織して自治権を得られることになった。北西部条例では、さらに人口が増加するとその領地は州として成立する事が可能になり住民も既存の州の住民と同等の権限をもつことになった。つまり、財産をいくらか持っている者なら誰でも、西部に行けば豊かで広大な土地が得られ、社会的・経済的に向上することができたのだ¹。この二つの制度は合衆国の発達にきわめて重要な影響をもったが、その根底にはジェファソンの民主主義の理想から出る新国家体制の指針が横たわっていた。彼は、自由な独立小農民の組織する社会の建設、少数特権階級の統治の排除、一般人民の政治参与と自治の伸張を掲げ、これらを達成するための根本方針が国家創業のさいに打ち立てられた。東部の人口過剰や気にいらぬ政治的・社会的雰囲気から逃げ出ようとする衝動、変化への願望、冒険への渴望がこの二つの制度の成立とあいまって人々を西へと駆り立てたのだ。

もちろん、仕事で失敗し全てを捨てて開拓地へ行くといった考えや説もある。「安全弁」説である。これは、財産がなかったり不況のあおりで失業したりした人々が、故郷を捨て西に行くことで簡単に土地を得て貧困から脱出できたという、フロンティアを「約束の地」とする見方である。しかしこれは、開拓者たちが好景気の時に西方へ移動し、不景気の時には移動しなかったことが経済学者たちの統計による証明で明らかであり、現在では否定されている²。また

¹ R・A・ビルントン『フロンティアの遺産』（研究社叢書、1971年）、32頁。

² ビルントン、38頁。

農業には熟練の技術や知識が必要であり、都市で生まれ育った人なら、三、四十歳で農地へ移住したところで、そう簡単に成功した農民になることはできなかったのだ。

次でこうした西部開拓の過程において、人々の行動原理が自然環境・社会環境の変化によって変容していった点を考察する。開拓者たちは西へ向かうにあたり、太平洋岸のオレゴンやカリフォルニアなどの農業に適した土地を目指したが、そこにたどり着くためには果てしなく続く乾いた草原や砂漠を横切り、ロッキー山脈の険しい小道（トレイル）を幌馬車で行かなければならなかった。幌馬車とはキャンバス地の幌を馬車につけたもので、通常4頭ほどの牛に引かせた。遠くから見ると幌馬車は帆船のように見えるので、「プレーリー・スクナー（草原の帆船）」とも呼ばれていた。また雄牛の歩みはととも遅く、一日に20キロ進むのがやっとで、3000キロ以上にもわたる旅路を4か月から6か月もかけて進んだ³。彼らは同じ苦しみや喜びを共有することにより、協力の意識を高めていき、結束の強いコミュニティが生まれたのだった。

フロンティア（歴史家フレデリック・ジャクソン・ターナーによる定義では文明と未開の出会いの場所を意味する。1890年当時の国勢調査によれば、一平方マイルに二名以上六名以下しか住んでいないところをフロンティアと定めていた）のコミュニティの社会環境は、その基礎を東部の社会環境におきながらも全く異なっていて、独自文化が成立するのを助長したが、ビルントンによるとこれは以下の理由による。開拓地にひきつけられた人々の人種的・社会的な型の相違が、民族的優越の思想にとらわれない流動的な社会秩序を作り出すのに貢献したこと。新しい土地で革新に対して対応しようとする思いが、開拓民一軒一軒の孤立化・分散とあいまって、伝統主義が弱まったことなどである⁴。フロンティアの社会環境の主な効果は、伝統の支配と価値とを弱めることが出来た点にある。開拓者は自分たちが流動的で絶えず変化しつづける、いまだ固定していない社会にいることを見出し、そこでは今までに慣れてきた行動ではなく、社会的な実験をすることに一層の価値をおくようになった。特に重要なのは、開拓者たちが西方へと移動しながら、伝統との絆を断ち切ったことをはっきりと感じ、身につけていったという事実である。移住行為が、故郷での行動原理を支えていた社会的環境を取り除いたのだ。大部分のフロンティアのコミュニティでは、多様な場所と社会的背景を持った男女が移住してきていて、彼らの新しい生活においては、誰にも従属せず、伝統よりも革新を重んじる意識が高まったのだった。

最後に、開拓の経験の結果アメリカ人の性格に出現したより詳しい特色について、フロンティアとの関係も交えて述べる。観察者のブライス卿によると、アメリカ人は社会を犠牲にしても個人の向上を願い、民主主義を崇拝し、確固としたナショナリズムを持ち、物質主義的で楽天的な性格をもっている⁵。さらに、これらのうち「個人主義」と「平等」の概念について詳しく述べていく。アメリカ合衆国と比較すると、他のどの国家でも個人の自己主張の権利はそれほど頑固に防衛されていないし、他のどの国民でも、すべての人間の平等はそれほど声高に宣言されてはいない。東部では経済が分業に基づいていたので、人々は作動し続ける機械の歯車として生きる他なかった。それに比べて西部では、防衛や小屋の棟上げ、とうもろこしの

³ スコット・スティードマン『アメリカ西部開拓史』（三省堂、1994年）、12-13頁。

⁴ ビリントン、65頁。

⁵ ビリントン、74頁。

皮むきでの集まりにいたるまで隣人への依存はあったのだが、それでも比較的自給自足的であった。開拓民は自給自足が成功し、生産量も増加するだろうとの信念を抱いており、身の回りの天然資源を開発すれば自身の力で将来を切り開き繁栄を確保することができると思っていた。彼らは自作の穀物の市場への接近を容易にするため鉄道の運賃率の低減や、道具製造業者の価格高騰を規制するために政府援助を必要としたが、富を蓄積する過程では自分たちの自由に政府が干渉することを望まなかった。これがアメリカ人の国民性に見られる個人主義につながったといえる。

さらには、西部のすべてのコミュニティーで人々が階級の区別を一切拒んでいることは平等主義ともとれる。「上層」を自認する若干の人々は人から離れて貴族的な態度を身に着けていたかもしれないが、大多数の者はそのような人々とは異なった価値判断を持っていた。前歴ではなく、社会に対する現在および未来の貢献の観点から人は評価され、発展しつつある社会秩序の中で役割を上手く果たす者が尊敬された。また、封建的な身分階級制度の基盤であった土地概念が全くなく、人はみな平等に容易に土地を手に入れることが出来たので、誰でも小作人ではなく、自作農になれた。このことが自主独立の心を培い、今日に至るアメリカ民主主義の根本となった。

フロンティアは「アメリカ人」の性格の形成に極めて重要な役割を果たした。発見と探検の初期の時代から二十世紀初頭に至るまで、文明の快適さに満足せず、未開の地を目指したアメリカ人にとってフロンティアは文明の価値がテイストされる場でもあった。開拓地での成功と生き残りは個人の力にかかっていた。よく働き、創意工夫に富んだ強い人間のみが生き残った。そして、平等の精神からは民主的な政治への志向性も生まれた。各自が個人として投票する権利、生存権を主張する権利、参加する権利を持つと信じられ、これらの権利は所有する財産などに関わりなくそこに存在しさえすれば皆平等に得られるものと考えられた。このように、フロンティアがこれらの要素を生み出し、西部開拓者たちが従来の伝統にとらわれない文化を作り上げたことで、アメリカ人の国民性を形作ったといえるのだ。

【参考文献】

1. R・A・ビルントン、渡辺真治訳『フロンティアの遺産』（研究社叢書、1971年）
2. スコット・ステッドマン、猿谷要、清水真里子訳『アメリカ西部開拓史』（三省堂、1994年）
3. ジョアナ・ストラットン、井尾祥子・当麻英子訳『パイオニア・ウーマン：わたしの西部開拓史』（講談社、2003年）
4. オーガスト・ラドキ、川口博久・千葉則夫訳『アメリカン・ヒストリー入門』（南雲堂、1992年）
5. 鶴谷寿『アメリカ西部開拓博物誌』（PMC、1987年）
6. 明石紀雄『ルイス＝クラーク探検：アメリカ西部開拓の原初物語』（世界思想社、2004年）
7. 栗原達男「幌馬車の旅、三日間（フロンティアの旅——アメリカ西部開拓者の実像）」『季刊民族学』6-1（1982年）、8-9頁。

A : 今年度、実際に参照したもの

1. R・A・ピリントン、渡辺真治訳『フロンティアの遺産』（研究社叢書、1971年）
2. スコット・ステイードマン、猿谷要、清水真里子訳『アメリカ西部開拓史』（三省堂、1994年）
3. ジョアナ・ストラットン、井尾祥子・当麻英子訳『パイオニア・ウーマン：女たちの西部開拓史』（講談社、2003年）
4. オーガスト・ラドキ、川口博久・千葉則夫訳『アメリカン・ヒストリー入門』（南雲堂、1992年）
5. 明石紀雄『ルイス＝クラーク探検：アメリカ西部開拓の原初的物語』（世界思想社、2004年）
6. 栗原達男「幌馬車の旅、三日間（フロンティアの旅——アメリカ西部開拓者の実像）」『季刊民族学』6-1（1982年）、8-9頁。
7. 鶴谷寿『アメリカ西部開拓博物誌』（PMC、1987年）

B : 今後、参照予定のもの

1. C・A・ビーアド、M・R・ビーアド、高木八尺、松本重治訳『アメリカ精神の歴史』（岩波書店、1954年）
2. ジョン・C・ペリー、北太平洋国際関係史研究会訳『西へ！：アメリカ人の太平洋開拓史』（PHP出版、1998年）
3. 大森実『カリフォルニアを奪れ：リードの開拓魂』（講談社、1986年）
4. 斎藤眞『アメリカ精神を求めて 高木八尺の生涯』（東京大学出版会、1985年）
5. 高木八尺『アメリカ』（東京大学出版会、1962年）

米ソ宇宙開発競争の開始と I C B M

金子 俊太郎

序文

米ソ冷戦の期間については様々な見解がある。起源については第二次世界大戦が終結した 1945 年、アメリカ合衆国がトルーマン・ドクトリンを発表し反ソ路線を示した 1947 年といった説が存在する。終結についてはソビエト連邦の改革（ペレストロイカ）が失敗しエストニア、リトアニアが連邦からの独立を宣言した 1989 年とする説、ソビエト連邦がロシア共和国となった 1991 年とする説が存在している。しかし冷戦期間の正確な定義は本レポートの目的ではないので行わない。重要であるのは米ソが実に約四十年の間、お互いに間接的な干渉（双方の陣営への経済的・軍事的援助）や互いを意識した競争（宇宙開発競争・軍拡競争）を行いつつも、正式に宣戦布告を行わず、戦争状にまでは至らなかった点である。

その一因として注目したいのは大陸間弾道ミサイル（以下ICBM）の存在と宇宙開発競争である。ICBMは射程 5500km以上¹のミサイルであり、核兵器の運搬手段としては最短かつ最も確実な手段である。例えば 1962 年から配備されたアメリカのICBMミニットマンは射程 10000km、誤差半径 150m、最高時速マッハ 23 を誇り、アメリカ最西端の国境からモスクワに到達するまで 20 分もかからない。ICBMは両国にとって最も警戒すべき兵器であり続け、軍事衝突を避けさせ続けた。このICBMの発展に大きく寄与したのが宇宙開発競争である。ソ連ではスプートニク号を打ち上げたロケットR-7 をそのまま弾道ミサイルに転用し、アメリカではレーガン大統領が 1983 年に提唱した戦略防衛構想には衛星によるミサイルの探知・迎撃が計画に組み込まれた。宇宙開発計画の先進性を示すことはそのまま軍事力の強化と誇示に繋がったのである。本レポートではICBMの発展と宇宙開発競争によるロケット技術の発展との関連を論ずる。

1. ロケット軍事利用の発端

第二次世界大戦中に登場したナチス・ドイツの兵器V2ロケットは、米ソがロケットの軍事利用に注目する契機となった。射程距離は 320km に及びフランス本土から直接イギリスまで飛行することができ、また、飛行速度マッハ 4 は当時の飛行機の最高速度を超えていた。この兵器は大戦中から連合国の関心を集め、直接被害を受けたイギリスは 1944 年にいち早くV2の破片、発射場の調査を行っていた。しかし、本格的に調査を行い技術を手入れし、開発に成功したのはアメリカとソ連であった。

アメリカは 1945 年の 5 月にオーバーキャスト作戦を立案し、ドイツ人ロケット技術者の受

¹ アメリカ合衆国の北西国境からソビエト連邦の北東国境までの最短距離。第一次戦略兵器制限交渉（1969年）により米ソ間で定義された。

け入れとV2ロケットの回収を試みた。この作戦の目的は太平洋戦争の早期終結であったが、コードル・ハル長官は特殊情報機関のロバート・ステイバー少佐に対し、ソビエトに技術者を渡さないように強く求めている。この要求や、作戦以前にヤルタ会談でソビエトの占領地域とされていたヴェーネミュンデでこのような作戦を行ったことは冷戦の兆しと言える。この作戦によりV2計画の中心であったヴェルナー・フォン・ブラウン博士と彼の同僚 50 人余りがアメリカに亡命し、5月21日から31日にかけて貨車341両分のV2の完成品とその部品がアメリカへと運び込まれた。このアメリカの動きに対して、ソ連はイギリスのチャーチル首相がスターリンに宛てた書状からV2に注目しており、6月はじめにヴェーネミュンデを占領した。ソビエトは300人以上の技術者とV2の生産施設を無傷で手に入れることに成功したが、V2計画の中心人物であったブラウン博士とその同僚を迎え入れることには失敗した。

2. スプートニク・ショックまでのロケット開発

アメリカのロケット開発計画の中枢に据えられたのはブラウン博士である。ブラウン博士は1944年の二月に「兵器としてのロケットより宇宙開発を重視している」「ロケット技術を持ってイギリスに亡命しようとしている」と疑いをかけられ、処刑されかける。しかしながらアポロ計画の有用性を示す際に『『アメリカの国家安全をさらに保障する』』²と記しており宇宙開発によって軍事に貢献することに反対はしなかった。

アメリカがロケットの軍事利用を研究しはじめた当初、ロケットに核兵器を搭載することは想定されていなかった。V2ロケットは開発されたばかりの原子爆弾を積むには非力であるとされており、トルーマン大統領も大型ロケットの有用性には懐疑的であった。結果としてアメリカの軍事ロケット開発の方向性は大気中を飛ぶ中距離ミサイルの開発に定まり、核兵器を搭載する大型ロケットの開発は核兵器の小型化を待つことになった。こうしたことから、アメリカは宇宙開発についてはさほど関心を持たず、むしろ兵器としてのロケットを重要視していた。

他方で、ブラウン博士を招へいできなかつたソ連は開発計画の中枢にセルゲイ・コロリョフを据えた。コロリョフは1933年にソ連で初の液体燃料ロケットを打ち上げたジェット推進技術研究所の所長であったが、1938年の大粛清により投獄され、釈放後は戦闘機の開発に従事していた。コロリョフは一貫して大型ロケットの開発に従事することが出来たが、この理由にはスターリンが大型ロケットの開発について並ならない関心を抱いていたこと、ソビエト連邦が共産主義国家であり開発に参入してくる企業が存在しなかったことが挙げられる。開発は軍事省下の火砲総局の元でほぼ独占状態で行われていた。コロリョフは自らの管轄である特別設計局第三部に技術者を集中させることが出来たのである。しかし、全く他の機関と関わりを持たなかったわけではなく、人民委員会直属のソ連科学アカデミーはロケットの開発に少なからず貢献した。兵器であるロケットの開発に科学アカデミーが参加することが出来たのは、共産主義の前提である科学立国と結びついたからである。ソビエトにおける大型ロケットの開発は単なる兵器としてではなく、国是の体現という責務を負わされていた。結果、コロリョフは1953

² ヴェルナー・フォン・ブラウン、新羅一郎、伊佐喬三訳『宇宙にいどむ』（コロナ社、1968年）、184頁。

年に ICBM の定義である 5500km 以上の射程を超える射程距離 8000km のロケット R-7 の開発に成功する。これはアメリカ初の ICBM、アトラスが配備された 1958 年に先駆けるものとなった。翌年 1957 年、R-7 を使用したロケット「ヴォストーク」はスプートニク一号を搭載し人類初の人工衛星の打ち上げに成功した。

3. 宇宙開発競争の開始

スプートニク一号の打ち上げは民主主義陣営の国家に二つの大きな危機感を覚えさせた。一つはソビエト連邦の軍事力への危機感である。R-7 は既に 1956 年には ICBM として実際に配備されており、人工衛星ほどの大きさの物体を宇宙空間にまで運ぶことはソビエト本土から直接アメリカ本土を攻撃できることを意味していた。

もう一つは民主主義の正当性が脅かされることへの危機感である。宇宙という新しい領地への共産主義陣営の進出を許したことは、民主主義陣営が軍事力だけではなく、教育・科学・経済のあらゆる分野で敗北したと受け取られた。これにより民主主義陣営の国家ではあらゆる面で急激な改革が行った。例としては、国家防衛教育法（1958 年制定）が挙げられる。これによりアメリカは奨学金、教育への補助金を強化し高校・大学への進学率が 12%上昇した。そして小学校低学年からの教科内容の見直し、特に数学に論理的な思考と応用を求められた。これを受け、新たな教育課程の『新しい数学』が導入されたが余りに性急な教育改革は教育現場に混乱をもたらした。またアメリカ航空宇宙局（NASA）が設立されたのもこの年である。スプートニク・ショックをきっかけとして米ソが軍事力だけではなく経済・教育・国家の正当性においてまで競争を行う時代が始まり、宇宙開発競争はその最戦線となったのである。

4. まとめ

スプートニク・ショックにより、それまでのロケット開発競争は宇宙開発競争と変化した。つまり、単なる軍事力競争の場であったロケット開発が民主主義陣営と共産主義陣営の国家的優越を示す場としての重要な役割を持ったのである。これにより軍事力の増強で互いをけん制という直接的な力のみを頼っていた時代が終わり、国家の思想の正しさを証明する間接的な力で争う本格的な冷戦の時代が始まった。こうした情勢の中で新たな領地である宇宙への進出は激しさを増し、さらには仮想敵国として互いをけん制する軍事的目的である ICBM の発展も急がれた。こうして宇宙開発競争と核兵器の増強は互いに発展を促しあいながら、冷戦時代を形づくっていったのである。

【参考文献】

1. ヴェルナー・フォン・ブラウン、新羅一郎、伊佐喬三訳『宇宙にいどむ』（コロナ社、1968 年）
2. 富田信之『ロシア宇宙開発史 気球からヴォストークまで』（東京大学出版会、2012 年）
3. リチャード・ハリソン、竹内均訳『宇宙開発』（三笠書房、1981 年）
4. 的川泰宣『ロシアの宇宙開発の歴史 栄光と変貌』（東洋書店、2002 年）

A：今年度、実際に参照したもの

1. ヴェルナー・フォン・ブラウン、新羅一郎、伊佐喬三訳『宇宙にいどむ』（コロナ社、1968年）
2. 富田信之『ロシア宇宙開発史 気球からヴォストークまで』（東京大学出版会、2012年）
3. リチャード・ハリソン、竹内均訳『宇宙開発』（三笠書房、1981年）
4. 的川泰宣『ロシアの宇宙開発の歴史 栄光と変貌』（東洋書店、2002年）

B：今後、参照予定のもの

1. ヴェルナー・ドルンベルガー、村井卷之助訳『宇宙空間を目指して』（岩波書店、1967年）
2. 松岡完『20世紀の国際政治：二度の世界大戦と冷戦の時代』（同文館出版、2003年）
3. ウォルター・ラフィーバー、中嶋啓雄訳『アメリカ VS ロシア：冷戦時代とその遺産』（芦書房、2012年）
4. 和田修一『米ソ首脳外交と冷戦の終結』（芦書房、2010年）

ドイツ第三帝国の破滅

——幻想神話への抵抗——

木村 悦生

世界中を巻き込んだ第二次世界大戦は、年月を重ねるごとにドイツや日本を中心とする枢軸国側に不利な戦局となり、ドイツはヒトラーが自殺をしたのち降伏した。降伏に至るまでにドイツは度重なる敗戦で多くの犠牲者を出しており、降伏のかなり前からドイツの敗北は明白であった。戦争をより早期に終結させることは不可能だったのかの問題関心から、私はここでドイツの人々の中で「政府の方針に疑問を持った者はいなかったのか」を検証していきたい。

ナチは 1933 年に選挙によって合法的に政権を握った。しかし、この当時はまだヒトラーに対して懐疑的な者も多くいた。例えば、社会民主党、共産党の党员やカトリック、ブルジョアの陣営などである。このような状況で、ヒトラーは徐々に国民の信頼を勝ち得ていく。その一つの理由として、彼がそれまで解決されていなかった多くの国民問題を処理したことがあげられる。一つには、ドイツの経済の復興である。第一次大戦後から続いていたドイツの経済不況に対し、アウトバーンの建設で失業者をなくしたのである。この結果多くの労働者の間に「彼は仕事をつくった。そして彼はドイツを強くした」との意識が生まれた¹。他にもナチ政権は一般犯罪の撲滅に成功している。『アドルフがいた頃』には道路を歩いても安全だったとの証言が現在のドイツでも見られるほどである²。1934年6月にはそれまでナチの反対派への政治的暴力とテロ活動を行使して、ヒトラーの政権奪取に貢献した突撃隊隊長のレームが粛清された。突撃隊の隊員は時には警察官に対してさえ脅迫しており、ナチの指導部からも非難の声があがっていたからである。この事件で国民はヒトラーが秩序を維持するものと認識したのである。

こうした中で一般人の間で（ナチがマスメディアを独占したこともあり）「ヒトラー神話」が広がったのである。ヒトラーの取り巻きは腐敗と権力欲にまみれスキャンダルが絶えず、国民からは人気はなかったが、ヒトラーだけは一線を画し、その名声が傷つくことはなかった。このことを端的に表す、1934年国民投票で投ぜられた票中の言葉がある。「ヒトラーには賛成。手下どもには反対」³。

このような「ヒトラー神話」は後に、ヴェルサイユ条約の破棄、ザール地方の奪回、ラインラントの再入手など外交的才能と、たった4週間でフランスを占領した軍事的才能の一面が加えられることで、より強固なものになっていった。この神話に影響をうけなかった者たちもいる。左翼政党の一般党员たちである。しかし、彼らはもはや無力であった。警察がナチ側についたからである。もはやナチに対抗できる勢力はなかったのである。

¹ イアン・ケルショー「ヒトラーと民衆 ——ヒトラー神話、その虚構と真実——」、リチャード・ベッセル編、柴田敬二訳『ナチ統治下の民衆』（刀水書房、1990年）、108頁。

² リチャード・ベッセル編、柴田敬二訳『ナチ統治下の民衆』（刀水書房、1990年）、15頁。

³ ケルショー（ベッセル編、『ナチ統治下の民衆』）、106頁。

ナチは若者を教化することにも力を注いだ。「学校全体を見わたしても、少年団に入っていない者や、14歳をすぎてヒトラー・ユーゲントに入っていない者がいた記憶はない。加入するのはごく当たり前で、議論するような話ではなかった。最初からそう決まっているのだと多くの者も受けとめていたと思う」⁴。これは元ヒトラー・ユーゲント団員であるハンス＝ヨッヘン・フォーゲルの言葉だ。この言葉からわかるとおり、当時、ドイツの若者はナチスに対して友好的ななにかしらの組織に入っていた。その中でも最大の勢力を誇るようになるヒトラー・ユーゲントの指導者を務めたバルドゥール・フォン・シーラッハは、教育の術を心得ており、若者の心を掴むことに成功した。彼は若者たちに、ごく一握りの上流階級の者しか楽しむことができなかったスポーツや楽器などの余暇活動を提供した。このことは貧しい生活を送ってきた多くの若者たちにとって魅力的であった。ヒトラー・ユーゲントでは貧富の差などないものとして扱われた。シーラッハの「若者は若者によって指導される」との原則は若者達に広く共感をよび、彼らは自分より少し年上の指導者を尊敬した⁵。さらに尊敬のまなざしを受けた若者は自尊心をくすぐられ、与えられた責任をより果たすようになっていった。

ときとしてヒトラー・ユーゲントのメンバーは新たなメンバーを獲得するために暴力に訴えることもあった。街にはヒトラー・ユーゲントへの入隊を促すポスターが貼られ、学校にも圧力がかけられるようになった。このためナチに批判的な親でも自分の子がヒトラー・ユーゲントに入隊するのを止められなかった。このようにして隊員の数は年を追うごとに増していった。1933年には230万人だったのが1935年には357万7000人、1939年には10歳～18歳の若者の総人口のほぼ100パーセントにあたる870万人が加盟していた。こうしてヒトラー・ユーゲントは学校や家庭といった伝統的な権威に対抗しうるものとなり、それによってさらに若者の心を引き寄せた。さて、ここではどのようなことが行われていたのだろうか。最初のうちは前述の通り娯楽の提供を行っていたが、次第に若者たちを画一化するための強制と訓練が大半を占めるようになった。ヒトラー・ユーゲントは若者の自由時間を一秒単位で拘束するようになった。余暇活動はヒトラー・ユーゲントの中で行うようになり、団員は毎週土曜日学校へ行く代わりに「活動」に従事した。夏場に団員以外もナチ教化の授業を最低二時間聞かなければならなかった。

団員以外もナチ教化の授業を最低二時間聞かなければならなかった。作家のエーリヒ・レストは当時の生活についてこう振り返っている。「週のうち四日か五日はヒトラー・ユーゲントの活動に携わっていた。僕らはほんとうは何をやっているのだろうか、などと考える余裕もない。気がつくともう次の活動が始まっていて、息つくひまもなかった」⁶。

これこそがシーラッハの望んでいた状況だった。彼は若者が独自の考えを抱くことを禁止したかったのであり、彼がほしかったのは自分にとって不利益なことでも組織のために指導者の命令に黙って従うような人材だった。「彼らにもはや自由はない。死ぬまで自由はないのだ」⁷。

戦時中の1939年から1945年に入隊した若者たちはもっとも空虚な面を体験している。若い指導者は徴兵され、空襲によって多くのクラブの建物やスポーツ競技場が破壊され、訓練ばか

⁴ ケルショー（ベッセル編、『ナチ統治下の民衆』）、106頁。

⁵ グノッ、133頁。

⁶ グノッ、138頁。

⁷ グノッ、138頁。

りが続いたため、若者にとって楽しみのないものになってしまった。

ヒトラー・ユーゲントに対抗した組織もある。30年代末に登場した「エーデルワイス・パイレーツ」がその一例である。この組織は14歳から17歳までの若者がヒトラー・ユーゲントから各々の自由時間を守るために自然発生的に生まれた。彼らは週末にはハイキングにでかけるのが楽しみで、ヒトラー・ユーゲントのパトロールを避けたり、ときには襲い掛かったりしながら楽しいひとときを過ごした。だが、次第にこの活動も取り締まられるようになっていった。まずそのメンバーの個々人に対する警告から始まり、逮捕、拘留、矯正プログラム、そして最終的に強制収容所に送ったのである。

エーデルワイス・パイレーツの首謀者とされた12名に限っては、1944年の11月に公開の絞首刑に処せられている。このような状況下のなかで青少年たちは教化されていった。当時の体制や組織に表立って反対していた人間は、すでに消されてしまった。たとえ運よく疑問を持ったとしても、表向きにそれを表現すれば同世代の仲間からの迫害が待っていただろう。ゆえに、そのような人々も、結局のところ命令に従わなければならなかった。

以上のことから、ナチは最初に国民たちが喜ぶ政策を行った後に、次第に国民たちをナチにとって優秀な手駒として教化していったことがわかる。ナチスに刃向えば厳しい処罰が待っていた。そのため多くの反抗勢力は壊滅されている。しかし、それでも政府のやり方に対して疑問を持ち反対した人はいたのだ。これはヒトラーの暗殺計画が実に40回以上も企てられていたことからもうかがえる。ただ、多くの人々はナチの宣伝するヒトラー神話を信じたのもまた事実である。彼らは英雄ヒトラーという虚像に忠誠を誓うように教化されたのである。当人たちにとって「自分たちが教化されている」事実は気づきにくいものである。

だから、私は警告したい。このことは何も昔に限った話ではない。もしかしたら今行われている教育が指導者のための道具をつくる「教化」書であるかのもかもしれないのだから。ときには自分たちの常識すらも疑わなければならない。それが現代に生きる我々が過去から学ばなければならないものであるのだ。

【参考文献】

1. グイド・グノップ、高木玲訳『ヒトラーの共犯者』下巻（原書房、2001年）
2. リチャード・ベッセル編、柴田敬二訳『ナチ統治下の民衆』（刀水書房、1990年）

A：今年度、実際に参照したもの

1. カール・E・ボルン、鎌田武治訳『ビスマルク後の国家と社会政策』（法政大学出版局、1973年）
2. ロタール・ガル、大内宏一訳『ビスマルク 白色革命家』（創文社、1988年）

B：今後、参照予定のもの

1. セバスティアン・ハフナー、山田義顕訳『ドイツ帝国の興亡：ビスマルクからヒトラーへ』（平凡社、1989年）
2. エーリッヒ・アイク、救仁郷繁他訳『ビスマルク伝』1-8巻（ペリカン社、1993-99年）

別角度から見たホロコースト

佐藤 聡太

ホロコーストは第二次世界大戦の際にナチスドイツが引き起こした人類史上類を見ない民族虐殺事件である。ホロコーストの犠牲者の一人であるアンネフランクの書いた『アンネの日記』などの影響もあり日本に住む我々にとっても常識の言葉である。今でもポーランドではアウシュビッツ強制収容所がホロコーストを語り継ぐ負の遺産としてその姿を残しているのである。ナチスドイツによって作られた強制収容所はアウシュビッツ以外にも多々ある。だが専門家でもない限り、その他の収容所は名前すら聞いたことがないのが普通であろう。それもそのはずである。アウシュビッツ強制収容所での犠牲者の数は桁外れなのである。データ的に見るのであれば、アンネフランクが犠牲になった強制収容所であるベルゲン・ヘルゼン強制収容所の犠牲者が約 5 万人であるのに対しアウシュビッツ強制収容所は約 126 万 1000 人。アウシュビッツ強制収容所では実に四年半に渡り一日平均 710 人もの人たちが虐殺されていたのである。このデータだけを頼りにするのであれば人類史上最悪の民族虐殺であったと結論づけることができるが、データだけでは片づけられない問題もある。ホロコーストについて調べる中で一つの疑問が浮かんできた。それはホロコーストが行われていることにドイツ市民は気づいていなかったのか。もし気がついていたのであれば、なぜそれでもヒトラーを支持したのか。この疑問点を様々な角度から考察していくこととする。

まず初めに、当時のドイツ国民のホロコーストに関する認知を考察する。ハンブルクに当時住んでいた女性の日記にはこのような記載がある。ハンブルクでは拍手喝采している群衆の中を通過して、強制移送者たちがトラックへと追いやられていった¹。同じような記載はさまざまな人々によってなされていた。このようなことからガス室で虐殺されていることは認知していなかったかもしれないが、ユダヤ人に対しての民族差別が国ぐるみで行われていたことを当時のドイツ国民が認知していたことは紛れもない事実であろう。ではここで一つの疑問が生まれる。先ほど引用したドイツ人女性の日記には「拍手喝采」という記述が見られた。ほかの資料にも「笑っている子供たちの姿が見られた」「移送される者たちの所有物が公売にかけられていた」といったことが書かれていた。ユダヤ人と同じ目にあわされるのが怖いので、ヒトラーに反抗せず、見て見ぬふりをするのならば、何も疑問を抱くことではない。このような記述を見ると、当時のドイツ人はユダヤ人が強制連行されることに賛同し、まるで喜ばしいと思っていたとも理解できてしまうのではないか。その当時、日本でも南京大虐殺といった残忍な出来事が起こっていた。だが、そのことについて国民から批判の声はほとんどあがることがなかった。しれもそのはずである。国民はそのことをほとんどが知らなかったのだから。だが、ドイツで

¹ フランク・バヨール、ディーター・ポール、中村浩平、中村仁訳『ホロコーストを知らなかったという嘘』（現代書館、2011年）

のホロコーストについては話は別である。国民の目の前で行われていたことなのだから。次の段落ではこのことに関する疑問を自分なりに答えをまとめたうえで考察していきたい。

まず、ドイツ国民の反ユダヤ主義を掲げる大きな原因として、第一次世界大戦のドイツ敗戦に不景気が影響していることがあげられる。有名な話では、パンを買いに行くにも両手で抱えきれないほどの札束が必要になるハイパーインフレがあげられる。ドイツ人たちが第一次世界大戦後の復興に苦しむ一方で、貿易商を生業とするものが多かったユダヤ人は前大戦において儲けたものが多数いた。これは日本でいう船成金みたいなものであろう。金に困っているドイツ人たちはユダヤ人に資本の援助を頼むしかなく、その借金を巡りユダヤ人への嫌悪感を覚えていったのであろう。このことが民族虐殺を国ぐるみで行うきっかけの一つになったことは間違いないだろう。

他に言うのであればホロコースト自体がなかったとする学説（アウシュビッツとアウシュビッツの嘘での記述）は、医学博士ティル・バスティアンの『アウシュビッツとアウシュビッツの嘘』で紹介されていた学説である。この学説を簡単に説明すると、ユダヤ人の虐殺は行われていなかったとの立場を取っている。ナチスドイツは第二次世界大戦の終盤、ドイツ軍の敗戦が濃厚になってきた際に各地にある強制収容所を取り壊した。現在でも残るアウシュビッツ強制収容所ではユダヤ人たちを虐殺した証拠としてガス室と呼ばれる設備が残っている。この著書にはこのような記述がある。大量虐殺から 44 年もたって、壁面に生産残留物はほとんど検出されなかった²。このようなことからアウシュビッツ強制収容所のガス室とはナチスドイツへの報復としてポーランド政府がでっち上げたものである、と分析している。このような考察の仕方はあるはずであるし証拠もないわけではない。敵国により大げさに非難をされてはいるが、ホロコーストがなかったと考えることはできないのである。

あえていうのであれば戦争というものを見ることはそれぞれの立場により見方が変わっていくということだ。今日本に住む人たちがホロコーストを見たらなんてひどいことなのだとしか思わなだろう。それはわれわれは日本人であり、ユダヤ人やドイツ人ではないからだ。当時の不景気の最中にあったドイツ人にとって、ユダヤ人はドイツの不景気の元凶とまで考えるものであった。そのような人々とわれわれ現代人とを比べたならば、ホロコーストのとらえ方が異なっていて当然であろう。当時のポーランド人にとってドイツは憎き敵国であり、そんなナチスドイツの悪行を過剰に批判するためにホロコーストの事実をねつ造しても仕方のないことであろう。

結論としてドイツ市民はホロコーストを認知していたことは間違いないことであろう。だがその認知度とはどういうものであったのかということは曖昧なところもあるそれでもヒトラーを支持したのはドイツ市民の心の奥には反ユダヤ主義があったからかもしれない。

² ティル・バスティアン、石田勇治、星乃治彦、柴野由和訳『アウシュビッツとアウシュビッツの嘘』（白水社、2005年）

【参考文献】

1. ジョセフ・E・パシーコ、白幡憲之訳『ニュルンベルク軍事裁判（上下）』（原書房、1996年）
2. ティル・バスティアン、石田勇治、星乃治彦、柴野由和訳『アウシュビッツとアウシュビッツの嘘』（白水社、2005年）
3. フランク・バヨール、ディーター・ポール、中村浩平、中村仁訳『ホロコーストを知らなかったという嘘』（現代書館、2011年）
4. 五十嵐武士、北岡伸一編『[争論] 東京裁判とは何だったのか』（築地書館、1997年）
5. 宮野悦義、稲野強『裁かれざるナチス』（大月書店、1981年）
6. 前田朗『人道に対する罪』（青木書店、2009年）

A : 今年度、実際に参照したもの

1. ジョセフ・E・パシーコ、白幡憲之訳『ニュルンベルク軍事裁判（上下）』（原書房、1996年）
2. ティル・バステアン、石田勇治、星乃治彦、柴野由和訳『アウシュビッツとアウシュビッツの嘘』（白水社、2005年）
3. フランク・バヨール、ディーター・ポール、中村浩平、中村仁訳『ホロコーストを知らなかったという嘘』（現代書館、2011年）
4. 五十嵐武士、北岡伸一編『[争論] 東京裁判とは何だったのか』（築地書館、1997年）
5. 中島岳志『パール判事』（白水社、2007年）
6. 前田朗『人道に対する罪』（青木書店、2009年）
7. 宮野悦義、稲野強『裁かれざるナチス』（大月書店、1981年）

B : 今後参照予定のもの

1. アルベルト・アンジェラ、関口英子訳『古代ローマ人の24時間』（河出書房新社、2010年）
2. 堀賀貴『ポンペイの歴史と社会』（隔成社、2007年）
3. 本村凌二『帝国を見せる剣闘士』（山川出版社、2011年）
4. 弓削達『ローマはなぜ滅んだか』（講談社、1989年）

中世イタリア都市におけるソシアビリテの性質と機能

——ヴェネツィアの「カーニヴァル」を例に——

篠塚 理沙

私たちは日々、学校やサークルや会社のみならず町内会や地域のボランティアなど、多種多様な人間関係で構成される共同体に属して生活している。中世の社会に生きた人々もまた、私たちと同様に地域や職業ごとの人々の結びつきが強く、それぞれの共同体は人々の生活の基盤であった。本レポートでは共同体内の人と人との強い結びつきの性質とその共同体の果たした機能を検証するため、中世イタリアの共同体とその延長上にある非日常的な「祭り」（カーニヴァル）を例に用い、「ソシアビリテ」（sociabilite）という概念をキーワードに考察する。

ソシアビリテ論とは、『人々との結びあうかたち』をさまざまなレベルにおいて歴史のうちに探ることをつうじて、固有の結合関係のうちに成立する社会・文化の独自性を明らかにするとともに、人間関係の性質や機能を解き明かそうとすること」を意図する¹。もともと集合心理学や社会学の分野で使用されてきたこの考え方を、最初に歴史学の分野に取り入れたのが、フランスの歴史家モーリス・アギュロンである。当初アギュロンはこの概念を、自身の研究対象である南仏プロヴァンス地方のみにみられる特有の概念だと位置づけたのだが、これについてミシェル・ヴォヴェルやジャン＝ピエール・ギュトンの批判を受けたため、彼自身はソシアビリテ論を、南仏プロヴァンス地方のみならず他のあらゆる国々にも当てはまる一般的な概念としたのであった²。また彼によれば、信心会やシャンブレのような「形をもったソシアビリテ」（sociabilite formelle）と夜の集いや酒場での集まりのような「形をもたないソシアビリテ」（sociabilite informelle）の二つを区別し、それぞれ相対的に自立しているとした³。両者が互いに影響し合うことで秩序をつくっているのだという。また、歴史学者である二宮宏之はソシアビリテの問題を、流動的な「形をもたないソシアビリテ」内の人々の「きずな」と、窮屈な枠組みを持つ「形をもったソシアビリテ」に縛られる「しがらみ」の両面からとらえた⁴。同じ共同体内の人と人との関係が密接で仲間意識が芽生えるからこそ、ある時はその「きずな」が「しがらみ」へと転化してしまうのだろう。共同体の人々の間に生まれる「きずな」が強固なために他の共同体への対抗意識も一層強まるはずであり、共同体内部の人々の結びつきの強さが外部の共同体への敵対心へとつながるとしたこの図式は、あらゆる国や地域の政治や文化などの事象の根底に存在しているのである。

では、こうした「形をもったソシアビリテ」と「形をもたないソシアビリテ」は、中世イタリア都市においてどのように機能していたのだろうか。中世イタリアの都市に生きた人々は、家族や親族、地域の結びつき（地縁）や職業の結びつき（同職組合）を通して、自分たちの「形をも

¹ 二宮宏之『ソシアビリテと権力の社会史』（岩波書店、2011年）、42頁。

² 斎藤寛海、山本規子、藤内哲也編『イタリア都市社会史入門』（昭和堂、2008年）、211頁。

³ 二宮、39頁。

⁴ 二宮、42頁。

ったソシアビリテ」を作り上げていき、これが彼らの生活の基盤となった。最初に挙げるべきものとして、家族や親族の在り方がある。現代の私たちが考える「家族」とは異なり、中世の人々の家族とは血縁関係のある親子や兄弟だけでなく、使用人の奴隷なども含まれていた⁵。従って、たとえ攻撃を受けるのが血のつながりのない使用人だとしても、一家総出で仕返しをするのが一般的であった。また、イタリアの人々は同じ地域に住む人々とも家族のように親しい付き合いをしていた。当時の住宅環境は快適な空間とはほど遠かったため、人々は街路や広場といった外部の空間を生活の場として共有し、そこに設置されている井戸も共同で利用していたのだ⁶。そのため、彼らは毎日顔をあわせ助け合い信頼関係を築いてゆく中で、自分が所属する「ソシアビリテ」への帰属意識を抱くようになったのであろう。

たとえば都市の面積が狭いヴェネツィアでは、路地（街路）の幅が狭いために人と人との間隔が必然的に短くならざるをえなかった⁷。またシエナの人々の生活の基盤となったコントラダと呼ばれる街区では、「独自の政庁や規約、財産、紋章、シンボル、色などを定め・教会では、子どもに洗礼を施し、結婚式や葬式をあげ、街区の守護聖人への崇敬が示され」るなど、信仰との結びつきも強かったことがわかる⁸。

イタリアでは都市の人口が増え、職業が多様化し、都市が発展するのに伴い、地域共同体だけでなく同職従事者同士のつながり、すなわち同職組合も重要になってくる。同職組合は、同じ職業同士の人々が自発的に立ち上げたものである。構成員の家族などの葬儀には全員が参列することが定められ、また、残された妻や子供たちや困窮した構成員の面倒をみる役割をもつなど、相互扶助を目的としていた⁹。たとえば、1384年のヴェネツィア近郊にある都市パドヴァの毛織物商組合の規約によれば、「仲間の葬儀に参列しているものは、死者が埋葬されるまで、手にロウソクを持って教会にとどまっておくこと（第39条）、羊毛を盗むなどの悪い評判が立った職人や親方との関わりを禁止すること（第47条）、同職組合の規約に定められた祝日を遵守し、違反者は罰金として5ソルドを支払うこと（第92条）」などが定められたことから、組合内の仲間との結びつきの強さ、そしてそれが規則により定められていたことがわかる¹⁰。これらの地域共同体や同職組合は、クリスマスや復活祭の際に教会へロウソクを捧げるなど、キリスト教の信仰との結びつきも強く、相互扶助と慈善を目的とした組織が多くつくられた¹¹。当時の多くの労働者階級や生活に困窮し身寄りがない人々など、なかなか家族などから支援を受けられなかった人々にとって、こうした助け合いの精神から受けた恩恵は計り知れないだろう。こうして彼らは、地域や職業ごとに仲間意識や連帯意識、助け合いの精神をもって「形のあるソシアビリテ」を形成してきたのであった。

しかし、現代でも地域間の紛争や日本国内の政党分立があるように、中世の時代においてもまた、家族や地域そして職業などそれぞれの共同体のもつ内向きの強固な仲間意識や連帯意識は、時として他の共同体への激しい敵対心へと転化した。人々がその対抗意識を発揮する場と

⁵ 斎藤、山本、藤内、211頁。

⁶ 斎藤、山本、藤内、212頁。

⁷ 永井三明『ヴェネツィアの歴史——共和国の残照——』（刀水書房、2004年）、227頁。

⁸ 斎藤、山本、藤内、212頁。

⁹ 斎藤、山本、藤内、214頁。

¹⁰ 斎藤、山本、藤内、216頁。

¹¹ 斎藤、山本、藤内、217頁。

して、「祭り（カーニバル）」が挙げられる。祭りといえども、現代の私たちが想像する夏祭りのようなものとは遠くかけ離れ、そこは人々のむき出しの闘争心と暴力が満ち溢れているのである。とはいうものの、人々は日常的に暴力をふるっているわけではなく、彼らにとって「暴力」とは、非日常的な「祭り」——共同体の結びつきを確認し、強化する場としての祝祭——に参加し、他の共同体と全身全霊をかけて戦い、自分たちの「富や名誉を誇示する手段」であった¹²。ヴェネツィアでは、戦い、すなわち「祭り」の舞台は主に戦い全体の動きを見渡す事が出来、敵を高いところからからかうことができる利点から橋がもちいられ、「周辺の建物に被害が及びにくく、一度に大勢の人間がぶつかりあうことができない狭い橋、しかも殴りあう男たちが運河に落ちやすい欄干のない橋の上に制限し被害を最小限に食い止めようとする」など、配慮がうかがえる¹³。最初ヴェネツィアでは、ほとんどの橋を戦いの舞台として使用していたのだが、次第に狭すぎる橋、ねじれた橋、戦士や見物人が近づきにくい地形にある橋は使用されなくなり、数か所の橋に限定されるようになった¹⁴。図1は1493年にヴェネツィアのフェッラーラ公夫妻のために見世物として意図的にサンタ・フォスカ橋の上で行われた祭りの様子である。



図1 ガブリエル・ベッラ画『サンタ・フォスカ橋における棍棒での戦い』¹⁵

闘争心をむき出しにした人々が棍棒を振りかざしながら押し寄せ、敵と激しくぶつかりあい橋から落下する人々の様子から、この「祭り」の激しさがうかがえる。さらに、橋の付近や建物の窓からたくさんの野次馬がこの戦いを見物していることから、この「祭り」がヴェネツィアの「見世物」として確立していたことがわかる。この「祭り」が偶発的に発生したけんかではないということが、橋の上でぶつかり合っている二派がそれぞれのお揃いの帽子をかぶっていることから明らかになる。右側から押し寄せる黒の帽子をかぶった人々はヴェネツィアを流れるカナル・グランデの西側に住むニコロッチェ派、左側から押し寄せる赤い帽子をかぶった人々

¹² 斎藤、山本、藤内、221頁。

¹³ 斎藤、山本、藤内、208頁。

¹⁴ 永井、240頁。

¹⁵ 斎藤、山本、藤内、206頁。

が東部のカステラーニ派であり、両者は長い間敵対していた¹⁶。両者を敵対させた原因は一体何であろうか。それは単に決して大運河を隔てて東と西に住んでいる地理的な理由からではない。両者の党派意識は、前に挙げた職業的な結びつきによるものであった¹⁷。共同体の内側の連帯意識が、外部への激しい闘争意識へとかわる瞬間である。東側のカステラーニ派の人々の多くは国営造船所の船大工や海員など、国家直属という特権を持ち、漁師が多い西側のニコロッティ派を見下していたことが、彼らの党派意識へとつながったのだ。結局この戦いは、1635年12月末に同橋でニコロッティ派が降伏し、カステラーニ派の勝利に終わった。両者のぶつかり合いの様子は、今日の俗謡のなかにもうかがえる¹⁸。

ひとりのニコロートが生まれたら神の御誕生

ひとりのカステランが生まれついたら悪漢の誕生

ひとりのニコロートが生まれたら伯爵様の御誕生

ひとりのカステランが生まれついたら極悪人の誕生

これに対しカステラーニはやり返す。

ひとりのカステランが生まれたらお城の完成

ひとりのニコロートが生まれついたら売笑宿の出来上がり

ひとりのカステランが生まれたら神が宿る

ひとりのニコロートが生まれついたら悪漢がいる

人々は自分たちの属する共同体の名誉を守るため、必死になって戦うのであるから、敗者側は相当な屈辱感を味わうことになるだろう。たとえ橋の上の「祭り」といえども、人々にとっては真剣勝負だったのだ。特に、普段公で発言権のない民衆にとって、政治体制へ反感を示す絶好の機会でもあった。忘れてはならないのは、非日常の「祭り」における各派の仲間意識そして他の共同体への対抗意識は、日常の共同体意識が根底にあるということである。つまり、「祭り」とは、日常の地域や職業と結びつき秩序をもった「形をもったソシアビリテ」の裏返しである、共同体と他の共同体との無秩序、暴力的で非日常的な「形をもたないソシアビリテ」の発揚なのではないだろうか。非日常的な「祭り」においても、人々を律しているのは日常生活の秩序や規範であるため、「祭り」とは、日常生活におけるソシアビリテを確認し強化する場であったのだ¹⁹。

このように、中世イタリア都市の人々は、同じ地域に住む人々や同じ職業に従事している人々と同士の共同体で強く結びつき、独自の「ソシアビリテ」を形成する傍らで、時にはその仲間意識から他の共同体と激しく対立し、自分たちの「ソシアビリテ」内の強いきずなや連帯意識を確かめ合っていたのである。以上のことから、中世イタリアでは人々の「ソシアビリテ」が、政治や文化などそこに暮らす人々のあらゆる事象の根底にあったことがうかがえるのではなからうか。

¹⁶ 斎藤、山本、藤内、208頁。

¹⁷ 斎藤、山本、藤内、238頁。

¹⁸ 永井、243頁。

¹⁹ 斎藤、山本、藤内、223頁。

【参考文献】

1. 二宮宏之『ソシアビリテと権力の社会史』（岩波書店、2011年）、42頁。
2. 斎藤寛海、山本規子、藤内哲也編『イタリア都市社会史入門』（昭和堂、2008年）、211頁。
3. 永井三明『ヴェネツィアの歴史 ——共和国の残照——』（刀水書房、2004年）、227頁。

A：今年度、実際に参照したもの

1. W・H・マクニール、清水廣一郎訳『ヴェネツィア：東西ヨーロッパのかなめ、1081-1797』（岩波書店、2004年）
2. 斎藤寛海、山本規子、藤内哲也編『イタリア都市社会史入門：12世紀から16世紀まで』（昭和堂、2008年）
3. 永井三明『ヴェネツィアの歴史：共和国の残照』（刀水書房、2004年）
4. 二宮宏之『ソシアビリテと権力の社会史』（岩波書店、2011年）

B：今後、参照予定のもの

1. アルベルト・ゴンザレス・トゥロヤーノ[ほか]、岡住正秀[ほか]訳『集いと娯楽の近代スペイン：セビーリャのソシアビリテ空間』（彩流社、2011年）
2. 清水廣一郎『イタリア中世の都市社会』（岩波書店、1990年）
3. 清水広一郎『イタリア中世都市国家研究』（岩波書店、1975年）
4. 竹中幸史『フランス革命と結社：政治的ソシアビリテによる文化変容』（昭和堂、2005年）

ジャガイモ飢饉の成り行きと誤ったレッセフェールの使用法

末兼 侑佳

歴史上において飢饉は疫病と並び地域、時代を問わず多大な死者を出してきた。そのなかでも私が最も自然的要因以外での影響が大きく関わり、大惨事になったと感じるのはアイルランドのジャガイモ飢饉である。この飢饉の成り行きを概観すると、1845年、イギリス南部のワイド島にて発見された新種の病原菌がブリタニア地方で蔓延し、ジャガイモに壊滅的な被害を与え、大量の死者を出したことに端を発する。この飢饉は1849年まで継続し、アイルランドではその国民の多くを失い、あるいは海外移民として流出させてしまった。ジャガイモ飢饉がこのような大惨事となってしまった要因について、私は新たに発見された病原菌がかつてのヨーロッパには無い、他地域からの疫病が何らかの理由でワイド島にて発見され、対抗する方法を思いつかないまま瞬く間にアイルランドへ伝染し飢饉を起こした、と仮説を立てた。

そもそも当時のヨーロッパで「悪魔の植物」として忌み嫌われていたジャガイモがアイルランド人にとって大切な食料となっていた過程を説明しておく必要があるだろう。ジャガイモがアイルランドに流入したのは16世紀末であり、17世紀には畑で自作する作物として受容され、栽培が普及した。そして18世紀になると麦に代わって主食の地位へと上がりつめたのである。これに関する主な理由として地理的要因と社会的要因が挙げられる。以下ではこれらの要因をそれぞれ考察する。

まず地理的要因として、アイルランドが高緯度地域に属していることが挙げられる。アイルランドをはじめ北部ヨーロッパ地域は約1万年前の氷河の影響が残っており、腐植土が育ちにくい環境、つまり、土地が痩せているのである。ゆえに、耕作可能な作物の種類に大きく制限がかかることとなり、この地域の住民は一般的にエンバクや大麦等の耐寒性のある作物を栽培するか、酪農を営んでいる。また、ジャガイモ流入以前のアイルランドでは食料として主にエンバクが栽培されていたが、それだけでは栄養が不十分なので酪農製品と一緒に摂取する必要があった。しかし、これらだけでは冬の間の食料確保が難しく、特にエンバクが不作の年にはひもじい思いをしなければならなかった。そのような地理的特徴を持つアイルランドでも、アンデス産のジャガイモは作付けが可能であった。ジャガイモ導入後はドッジが著した『世界を変えた植物』によると、「当時、アイルランドを旅行したある人は『ここでは一年のうち10ヶ月はジャガイモとミルクだけで過ごし、残りの2ヶ月はジャガイモと塩だけ食べている』と記されているように、ジャガイモ自体が栄養豊富であることは勿論、腹持ちも良かったことが伺える¹。

こうした地理的要因に対して、社会的要因は当時のアイルランドがイギリスの植民地のような状態に起因する。17世紀のピューリタン革命、名誉革命により、プロテスタント側のイギリ

¹ 山本紀夫『ジャガイモのきた道』（岩波書店、2008年）、84頁。

スが勝利し、国教徒優位体制が確立したことにより、カトリック側のアイルランドの土地が国教徒に収奪された。土地を奪われたアイルランド人はイギリス人地主の小作人になるしか生き延びる術はなく、そのためには地代として麦を納めなければならなかった。しかし、ジャガイモは地代に含まれていなかったため、小作人は地代の麦とは別に自分たちの食料としてジャガイモ栽培を始めた。その後、イギリス側の自由貿易政策により外国産の安い穀物との競争でアイルランド産のものが全く売れなくなったため、商品としての穀物栽培を諦めてジャガイモの自給自足へと転換していった。このような背景に加えて、ジャガイモが土地面積当たりの収穫量が穀物に比べ非常に多いことに収量単位当たりのコストがかからないことも相まって、ジャガイモ栽培が普及し、小作人の主食となっていたのである。こうしてジャガイモへの依存が次に述べるジャガイモ飢饉の背景の一つであるといえる。

さて、こうした要因を確認した上で、本題のジャガイモ飢饉について触れていくこととする。飢饉が発生した理由の一つとして最初に述べた病原菌についてであるが、この病気はアメリカ大陸由来のものであり、ヨーロッパでは知られていなかった。この病原菌により胴枯れ病が発生し、ジャガイモが腐ってしまうのである。ところが、実際のところワイド島で発見された疫病がイギリス本国で蔓延し始めても、アイルランド人にとっては対岸の火事状態とも言えるほどに無関心であった。程なくして疫病がアイルランドに上陸したが、1845年時点ではジャガイモの収穫量が半減するも、比較的影響は少なかった²。

それでは何故、ジャガイモ飢饉は大惨事となってしまったのか。病原菌の他にどんな理由があるのだろうか。実は自然的要因において、病原菌以外にジャガイモの生物学的特徴や天候不順が理由として数えられているのである。まず生物学的な観点からいえば、ジャガイモは塊茎で増える作物であり、それらは全て親芋と全く同じ遺伝子型であり、つまりところクローンである。クローンであるがゆえに、ある種類の病気がその遺伝子型において蔓延してしまうと、遺伝子多様性を欠くため、同型遺伝子は全滅することになるのである。当時のアイルランドではランパー種という品種のみが繰り返し栽培されており、胴枯れ病の流行に太刀打ちできなかったのだ。もう一つの天候不順については研究者により異なるため現段階では推測できる定説はない。たとえば、一つは「1845年夏、アイルランドにて長雨と冷害が発生した」³と述べられているのに対し、もう一つは「1845年、アイルランドでは例外的に暑さが続き、湿度も高かったため、ジャガイモに胴枯れ病をもたらす菌類が間食し、かの大飢饉につながってしまったのである」⁴と分析している。しかしながら、1845年に天候不順があったのは確かあり、飢饉に影響を与えた点では一致している。

しかし、本当に自然的要因だけでここまで飢饉が長引くものだろうか。アイルランドを自国の植民地同然に扱っているならイギリスがしかるべき飢饉の救済策を取っていたならば、ここまでの大惨事には至らなかったはずである。ここでアイルランドの大飢饉に対するイギリス本国の救済措置を分析しよう。飢饉が起こった当初、アイルランドでの被害は比較的軽微なものであったと前述したが、翌年の1846年の方が被害は大きかった。ジャガイモの9割が疫病に

² 山本、前掲書。

³ 波多野裕造『物語アイルランドの歴史 欧州連合に賭ける“妖精の国”』（中央公論社、1994年）

⁴ コリン・マッシュ、鶴島博和日本語版監修、君塚直隆訳『オックスフォード ブリテンの歴史 9 19世紀 1815～1901年』（慶応義塾大学出版、2009年）

かかった上に、冬には飢える民衆を豪雪が襲った⁵。これに対し当時の保守党のピール内閣はアメリカからトウモロコシを緊急輸入することにした。しかし、トウモロコシは粉にして食す必要性があったにもかかわらず、アイルランド人のほとんどが粉ひき機を持っていなかったため、実質何の助けにもならなかった。さらにイギリス政府はトウモロコシの粉を無料で配布したわけではなく、原価でアイルランド人に販売したのであった。これは当時のイギリスに存在した穀物法の影響で海外からの輸入穀物には高い関税がかけられ、結果的に本国产のものよりも値段が高くなってしまふからであった。大飢饉の間にイギリスでは政権交代が行われ、ピール内閣に代わりホイッグ党のラッセル内閣が飢饉の対処を担うようになった。ラッセル内閣は当時のイギリスに隆盛していた自由放任主義に基づいた対策を取るため穀物輸入を即時停止し、代わりに救貧法に基づいて救貧院に貧民を収容する策を取ったが、あまりにも貧民の数が多かったために、これは失敗した。

上の対策例を見る限り、イギリス政府はアイルランドの窮乏を直接援助するのを拒んでいるように思える。その理由として、自由放任主義に基づいた考え方が挙げられるのではないだろうか。そもそも自由放任主義とはアダム・スミスが著した『国富論』で述べられた考え方であり、世界中に影響を与える大国家になる以前の、産業や貿易の際他国に依存し影響を強く受けなければならなかった過去のイギリス政権が取ってきたイギリスと植民地間の貿易に関与させぬよう制定した航海法をはじめ自国の利益を政府の干渉により他国との貿易を制限する重商主義を批判し、それに対する新たな考え方として政府が経済に一切関与せず個人個人の商業的活動を推奨したすべし、というものである。言い換えれば「全てが自己責任」と言うようなものだ。この考え方は保守党よりホイッグ党の政策に色濃く表れていた。前述のように、保守党のピール内閣は救済策として穀物の緊急輸入を行い有料で販売したが、この背景には少なからず自由放任主義の考え方が影響している。より自由放任主義を信奉しているホイッグ党のラッセル内閣は言うまでもない。海外からの穀物輸入を停止し、救貧法に基づく救済策はあくまで「アイルランドの問題はアイルランド人自身が起こしたのだから彼ら自身で解決すべきだ」と言っているようなものであろう。さらに悪いことに、当時のイギリスでは金融危機により財政が悪化しており、あらゆる救済策には財務省の発言が強まっていた。飢饉当時の財務事務次官であるチャールズ・トヴェレリアン卿は熱烈に自由放任主義を信奉しており、救済への政府の関与を極力無くしたい個人的な見解をもち、自由放任主義的背景と相まってイギリス政府の政策に大きく影響したのだ。実際、イギリス政府のアイルランド救済に費やした費用は貸付金という形で1000万ポンド、すなわちクリミア戦争での出費の約2割程度であり、イギリス側のアイルランドへの一種の無関心さが表れている。また、救貧に至ってはアイルランド側も700万ポンドを救貧税として投資したところを見るとただ助けられるのを待つのではなく、自分たちで何とかしなければならなかった状況が見て取れる⁶。

大飢饉の結果、アイルランドでは餓死以外に飢えからくる衰弱により、赤痢や回帰熱、コレラなどの様々な疾患を患うようになり、一方でトウモロコシのひき割りのみを食べていた結果ビタミン類が不足し、壊血病を患った者もいた。これらの被害は土地や経済の豊かさの割に多

⁵ 山本、前掲書。

⁶ 海老島均、山下理恵子『アイルランドを知るための70章』（明石書店、2011年）

すぎる人口を抱えていたコノート地方など西部で顕著だった。というのも、西部には5エーカー以下の土地を所有する貧農が64%である上に、古来からのアイルランドの伝統により地主は小作人から税を取り立てていなかったため、地主側にも十分な資本がなく、結局は飢えた小作人を追い立てることとなり、救貧院政策の失敗を招いてしまった。また、死亡以外にアメリカをはじめカナダやオーストラリアなど世界中に移民を出すことになった。

このようにアイルランドに自然的にも人為的にも大打撃を与えたジャガイモ飢饉は後のイギリスとの関係に大きく悪影響を及ぼすこととなった。これについて、英文学者の小西康夫は「アイルランドのこの状況に対して、英国政府は有効な手段を講じることができなかった。大地主は、この飢饉と移民による人口減少の中にあっても、農民からの収奪の手を緩めなかった。こんな状況の中から、アイルランドの独立を目指す民族運動が沸き起こって」きたと指摘している。また、飢饉により当時は800万人を数えたアイルランド人口が、死者や移民により5年間で600万人に減少した⁷。この影響は現在のアイルランドの人口停滞に直接影響している。この状況を見て19世紀のアイルランドのナショナリスト、ジョン・ミッチェルは「神がジャガイモの胴枯れ病をわれわれに与えたが、イングランド人が飢饉を作り出した」と形容している⁸。

以上よりアイルランドのジャガイモ飢饉はアメリカ大陸からの未知の疫病と天候不順により発生し、イギリス本国の誤った自由放任主義に基づく救済策により長引き、多数の国民を失う大惨事となったのである。また当時のイギリス政府が植民地同様のアイルランドをあらゆる面でないがしろにしていたことが浮き彫りにされた一連の流れとも捉えられる。

【参考文献】

1. 海老島均、山本理恵子『アイルランドを知るための70章』（明石書店、2011年）
2. 小西康雄「アイルランドのジャガイモ飢饉 それがアイルランドと世界にもたらしたも『明治大学農学部研究報告』133号（2003年）
3. コリン・マッシュー編、鶴島博和日本語版監修、君塚直隆訳『オックスフォード ブリテン諸島の歴史 9 19世紀 1815～1901年』（慶應義塾大学出版株式会社、2009年）
4. 波多野裕三『物語アイルランドの歴史 欧州連合に賭ける“妖精の国”』（中央公論社、1994年）
5. 山本紀夫『ジャガイモのきた道』（岩波書店、2008年）

⁷ 海老島、山下、前掲書。

⁸ 海老島、山下、前掲書。

A : 今年度、実際に参照したもの

1. コリン・マッシュー編、鶴島博和日本語版監修、君塚直隆訳『オックスフォード ブリテン諸島の歴史 9 19 世紀 1815～1901 年』（慶應義塾大学出版、2009 年）
2. 海老島均、山本理恵子『アイルランドを知るための 70 章』（明石書店、2011 年）
3. 木畑洋一『大英帝国と帝国意識 支配の真相を探る』（ミネルヴァ書房、2000 年）
4. 小西康雄「アイルランドのジャガイモ飢饉 それがアイルランドと世界にもたらしたもの」『明治大学農学部研究報告』133 号（2003 年）
5. 高橋哲夫『アイルランド歴史紀行』（筑摩書房、1991 年）
6. 波多野裕三『物語アイルランドの歴史 欧州連合に賭ける “妖精の国”』（中央公論社、1994 年）
7. 山本紀夫『ジャガイモのきた道』（岩波書店、2008 年）

B : 今後参照予定のもの

1. J・C・ベケット、藤森一明、高橋裕之訳『アイルランド史』（八潮出版社、1976 年）
2. 岡寄修『レッセ・フェールとプラグマティズム法学 19 世紀アメリカにおける法と社会』（成文堂、2013 年）
3. カービー・ミラー、ポール・ワグナー、茂木健訳『アイルランドからアメリカへ 700 万人 アイルランド人移民の物語』（東京創元社、1998 年）
4. 三浦永光『ジョン・ロックとアメリカ先住民 自由主義と植民地支配』（御茶の水書房、2009 年）

フランス革命とロマン主義の関係性

高田 匠唯

ベートーヴェンの交響曲第9番を一度も聴いたことがない人はいないだろう。この曲のもっとも有名な部分にあたる第4楽章の合唱部分の歌詞は、ドイツの作家、詩人であるフリードリヒ・シラーの1785年の詩作品『自由賛歌』を改訂して用いたものである。ベートーヴェンがこの曲を作曲したのはもっと後だが、この曲の構想自体はかなり前からあったと言われており、実際に「自由賛歌」が発表された当初、ベートーヴェンがこの作品をかなり気に入っていたようである。1785年はフランス革命の直前にあたる。後に革命の騒乱の中から登場するナポレオンのことも、共和主義者であったベートーヴェンは相当の共感と賞賛を示していた。ナポレオンはその後敗れ、失脚したが、彼が欧州世界の、絶対王政という名の専制が行われていた国々に自由主義と共和制の種を蒔いたことは事実である。ナポレオン失脚後の、自由主義と共和制の揺籠期に、文学や音楽、絵画等芸術の世界は、「ロマン主義」と呼ばれる作風が主流となるのである。個人的に、ロマン主義の誕生と主流化の背景には、フランス革命と、それに伴う自由主義の考えがあったのではないかと考えた。そのため、本稿では、ロマン主義の誕生、主流化と、絶対王政から自由主義と共和制へシフトした要因たるフランス革命の関係性について検証する。

フランス文学史において、ロマン主義の時代は1820年から1850年である。ロマン主義とフランス革命の時代が離れすぎており、関係性は薄いと考えられるかもしれないが、文学史家のフィリップ・ヴァン・チーゲムが著書『フランス・ロマン主義』で、文学史上のロマン主義が誕生する1820年以前に、ロマン主義芸術の作風や性格は芸術にすでに表れていたがあまり目立ちも広まりもせず、さらに17世紀に隆盛していた古典主義の性格や特徴が混入していたため、文学上の新たな芸術の流儀が誕生したとはだれも考えなかったと論じた。そうした作品群を指して、彼は「前ロマン主義」と呼ぶ。時系列順に並べるとフランス革命、前ロマン主義、ロマン主義の順に派生したと考えられているが、前ロマン主義とロマン主義の二つは関係性が明確である。従って、フランス革命と前ロマン主義の関係性を考察する。ロマン主義は前ロマン主義とほぼ性格を同じくするものであり、性格や特徴における差異はないが、チーゲムは「当時の文芸作品に表現され始めた、わけても感情表現を主体とするまだ漠然としていた諸傾向の総称である」と定義している¹。ロマン主義は、前ロマン主義の後に一層才能と大胆さに恵まれた芸術家によって確立されたが、特徴や性格において違いはない。前ロマン主義がロマン主義と区別されているのは、古典主義からロマン主義の過渡期にあたる時期に、未だ大成していないが、古典主義芸術とは異なる新しい感受性と表現がみられる流儀を、前ロマン主義と呼んでいるにすぎないのである。

¹ フィリップ・ヴァン・チーゲム、辻和訳『フランス・ロマン主義』（白水社、2000年）、6頁。

前ロマン主義が興った 18 世紀を考えるにあたって、ルイ 14 世を振り返る。ルイ 14 世の時代を振り返る理由は、芸術史において前ロマン主義の前の流儀にあたる古典主義が大成されたのが、彼の時代であるからである。太陽王の時代について、文化史家で作家のマックス・フォン・ベーンは以下のように述べている。

「厳しい秩序の時代だった。思想も感情もこの秩序に服していたのであり、精神を圧迫する強制に反抗する思想家や自由人はいたが、控訴する機関がまだなかった。(中略)。ところが王の死によってこの情勢は一変し、尊敬というものを念頭に置かなかった摂政のもとで、世論という怪物が秩序にとって代わった。王が民衆の声に耳を傾け、その判断を信頼するなどということは、太陽王の時代には考えられなかったことである」²。

つまり、絶対王政の時代に、「民意」は政治に一切介入できなかったのである。しかし、ルイ 14 世が死去し絶対王政が崩壊するとそれ以降の為政者は政策立案に民意を取り入れていくのである³。その後、ベーンが指摘する通り、政府は哲学を使って世論を操作しようとしたが、後に哲学そのものが主権を確立し、その目論見は崩れたのである。さらにベーンは、ヴォルテールやルソー等の啓蒙思想の哲学者たちの力によって、「絶対宗教から不信仰へ、絶対王政から共和制へ、階級国家から市民の平等へと道を開いていったことは否定できない」と指摘する。つまり、哲学が人々の心性を変化させ、それが革命につながったのである⁴。

こう捉えるのであれば、革命を引き起こした人々の感受性の変化も原因として考えねばならない。再びチーゲムの議論に目を向けると、フランス文化はそれまでとは違って感情の権利を自由に表明しようとしたのだし、混沌たる社会状態から逃れさせてくれた今までの規律を嫌い、放恣な情熱を喜んだのである。と分析している⁵。革命者たちは、この規律で統一されていた状態からの解放を望んでいたのである。ドイツ文学者の中村美智太郎も、「ロマン主義者は、こうした事態をただ「受け入れる」だけだったのだろうか。たとえこの分裂から「脱しきれずに」いたとしても、この分裂の存在を発見し、そしてそこから脱しようとする試みがドイツにおける初期ロマン主義の精神のありようとは言えないだろうか」とし、さらに「これを「無政府状態」であると批判するこの状態から新しい領域へと移行する可能性をみており、この意向を「大変動」と名付ける」と同様な解釈を示している⁶。つまり、ロマン主義の芸術と同様に、民衆が感情の発露の時代を求めたと言えるのである。

こうした感受性は、いくつかの芸術作品でも見出すことができる。例えば、フランシスコ・デ・ゴヤの絵画『厳冬』は、旅人が凍える冬の寒さの中、マントに身を寄せ、わずかな火に身をかかげながら歩いている絵画である。この絵画は、単純に厳冬を描いたものではない。18 世

² マックス・フォン・ベーン、飯塚信雄訳『ロココの世界 ——18 世紀のフランス——』（三修社、2000 年）、115 頁。

³ ベーン、116 頁。

⁴ ベーン、115 頁。

⁵ チーゲム、7-8 頁。

⁶ 中村美智太郎『ドイツ・ロマン主義と美的革命の精神：フリードリヒ・シュレーゲルとシラーにおける「分断」と「統合」の問題』一橋大学大学院言語社会研究科『言語社会』3（2009 年）、317-330 頁。

紀文学研究者でフランス学士院会員のジャン・スタロバンスキーはこの作品をして、「雹や嵐や氷雪は、自然の災害というよりも、はるかにそれ以上のものを意味していたことがわかる。それらは、切迫した国庫の破産、制度の老朽化、人民の困窮などが、自然界の規模で自己を表明している、知覚可能なイメージなのである」と評している⁷。加えて、かつては敬意の対象であった宮殿などの豪華な建造物に対する民衆の反応は冷めていき、今までとは逆に怒りの対象にさえなった。「計算することを学んだ観衆には、豪華の魔術は作用しなくなった。莫大な費用は、もう驚きと尊敬の念を起こさせるものではなくなった。重要なのは、ただ、これらの宮殿を作り出した労働のみである。そして、もし彼らがいなければ、この輝かしい社会の幻の装飾も存在しないはずの無名の人々が、彼らの不満を聞かせようとしているのである」⁸。フランス革命の原因の一つたる民衆の怒りが絵画に表現されており、この様な例からも絶対王政期には考えられなかった民衆の感受性の変化が起こったのである。

以上のことから、絶対君主であったルイ 14 世の死が、フランス革命を引き起こす精神的な要因の一つとなり、その革命がフランス以外の未だ専制を行う欧州諸国の国々に感受性の変化をもたらした結果、芸術の流儀としてのロマン主義が誕生した。ロマン主義による自由で感情を重視する芸術が誕生したことにより、より民衆の直接的な感情が芸術という手段で表現されるようになる。その後の時代の動乱や戦争が、民衆の平和への願い等と結びついた芸術を生むこととなる。国民国家が成立する時代においては、ナショナリズムと結びついた芸術が生まれる。その素直な芸術が生まれる感受性の大きな原点は、フランス革命にあると言えるのである。

【参考文献】

1. リュディガー・ザフランスキー、津山拓也訳『ロマン主義 ——あるドイツ的な事件——』（法政大学出版局、2010年）
2. ジャン・スタロバンスキー、井上堯裕訳『フランス革命と芸術』（法政大学出版局、1989年）
3. フィリップ・ヴァン・チーゲーム、辻昶訳『フランス・ロマン主義』（白水社、2000年）
4. マックス・フォン・ベーン、飯塚信雄訳『ロココの世界 ——18世紀のフランス——』（三修社、2000年）
5. 中村美智太郎「ドイツ・ロマン主義と美的革命の精神：フリードリヒ・シュレーゲルとシラーにおける『分断』と『統合』の問題」一橋大学大学院言語社会研究科『言語社会』3（2009年）、317-330頁。<<http://hdl.handle.net/10086/18283> 最終アクセス2013年12月23日>

⁷ ジャン・スタロバンスキー、井上堯裕訳『フランス革命と芸術』（法政大学出版局、1989年）、9頁。

⁸ スタロバンスキー、12頁。

A：今年度、実際に参照したもの

1. モナ・オズーフ、立川孝一訳『革命祭典 フランス革命における祭りと祭典行列』（岩波書店、1988年）
2. アンリ・カルヴェ、井上幸治訳『ナポレオン』（白水社、1966年）
3. ルネ・セディユ、山崎耕一訳『フランス革命の代償』（草思社、1991年）
4. フィリップ・ヴァン・チーゲム、辻昶訳『フランス・ロマン主義』（白水社、1990年）
5. T・C・W・ブラニング、天野知恵子訳『フランス革命』（岩波書店、2005年）
6. アレクサンダー・リンガー、西原稔訳『ロマン主義と革命の時代』（音楽之友社、1997年）
7. 遅塚忠躬『フランス革命 ——歴史における劇薬』（岩波書店、1997年）
8. 桑原武夫『世界の歴史 10 フランス革命とナポレオン』（中央公論新社、2000年）
9. 竹中幸史『図説 フランス革命史』（河出書房新社、2013年）
10. 谷川稔、渡辺和行編『近代フランスの歴史 ——国民国家形成の彼方に——』（ミネルヴァ書房、2006年）
11. 竹中幸史『図説 フランス革命史』（河出書房新社、2013年）
12. 中野京子『マリー・アントワネット』（朝日新聞出版、2012年）
13. 松浦義弘『フランス革命の社会史 ——世界史リブレット 33』（山川出版社、1997年）

B：今後、参照予定のもの

1. ロジェ・シャルチエ、松浦義弘訳『フランス革命の文化的起源』（岩波書店、1994年）
2. ウォルター・ジャクソン・ベート、青山富士夫訳『古典主義からロマン主義へ』（北星堂書店、1986年）
3. チャールズ・ローゼ、朝倉和子訳『音楽と感情』（みすず書房、2001年）
4. 塩川伸明『民族とネイション』（岩波書店、2008年）
5. 塩野谷祐一『ロマン主義の経済思想 芸術・倫理・歴史』（東京大学出版会、2012年）

スペインの征服によるマヤ文明の文化変容と崩壊

田渕 由利恵

2012年12月23日に人類は滅亡するかもしれない。これはマヤ文明の長期暦と呼ばれる暦が周期の終わりを迎えることで世界の終わりをも意味する、というマヤ暦に由来する2000年代から2012年までにラテン・アメリカを中心に世界中に流布した予言説である。もしこれが、まったく根拠のない予言であるならば、ここまで世間を騒がすことはなかったであろうが、「未開の文明」であったマヤ文明が有していた非常に正確な暦が、世界の終焉を予言していたことに話題性があったのだろう。このような数々の発達した暦を持ち、土着の宗教を発達させたマヤ文明であったが、16世紀から17世紀にかけてスペインの征服により消え去ったようにみえた。しかし、それは綿密には正しい認識ではない。マヤ文明は破壊されたが、すべて消え去ったわけではなく、マヤ文化、マヤ人は今なお存在する。あたかもマヤ=消え去ったもの、であるかのように語られるのはなぜだろうか。それはスペイン人による征服を、帝国主義的なスペイン、または特定の個人の目線から描いたものが歴史として語られていることに加え、マヤ文明がスペイン文化を広く受容し、大きく変化したことからである。本レポートでは、スペインが書き残したマヤの歴史と、マヤのスペイン文化の受容について考察する。

インターネット上の記述でも、あるいは教科書でも16世紀にマヤ文明は滅び去ったとの認識が少なからず存在する。しかし、文化人類学者の青山和夫が指摘するように「マヤ高地は、先スペイン期に政治的に統一されることはなかった」のであった¹。また、青山は植民地時代のインディオ期にも「マヤ人は先スペイン期と同様に、外来の文化要素を取捨選択して、あるいは強制されたものを自己流に解釈して新たなマヤ文化を創造し続けた。土着宗教を根絶してマヤ人をキリスト教徒に強制的に改宗する「魂の征服」は、失敗に終わった」と指摘し、コンキスタドールによる征服が完全に成功して、マヤ文明が消え去ったわけではないことがわかる²。しかし、この時代以降、マヤの文化はスペインの影響をうけ、マヤ独自のものから大きく変わってしまう。たとえば、エンコミエンダが敷かれた植民地時代には「スペイン的、キリスト教的な要素が、先住民文化に合致するように改変されながら、マヤ人の生活の中に広く浸透していった」と文化人類学者のマイケル・D・コウは述べる³。この大きな変化を指して「マヤ文明の崩壊」と言うこともできなくはなさそうだが、マニ村がカトリックによる破壊を受けつつも、カトリックとマヤの融合文化の一例であることから融合、変容といった形で存在し続けていたといえる⁴。この融合、変容はマヤ貴族たちがアルファベットを用いて歴史を記録した

¹ 青山和夫『古代マヤ文明 石器の都市文明』（京都大学学術出版会、2005年）

² 青山、307頁。

³ マイケル・D・コウ『古代マヤ文明』（創元社、2003年）、319頁。

⁴ 中別府温和「メキシコ低地マヤ地域におけるカトリック的宗教文化統合の実証的研究——マヤ・ユカテカのカトリック村落マニの空間感覚分析のための序論的考察——」『宮崎公立大学人

ことや、現在のユカタン料理に表れている。

確かに、マヤ人はスペインがもたらしたインフルエンザや天然痘に苦しめられ、征服後はスペインのための労働に従事しなくてはならなかった。このような状況下でのマヤ文明のスペイン文化の受容は、上記した、スペインによる魂の征服により、受け身の姿勢でしかたなく行われたものであることは間違いない。だが、多神教のマヤ文明はキリスト教世界をマヤの宗教に取り込んでしまった。マヤの宗教とキリスト教は似通った部分が多々あり、このシンクレティズムは当然であったとの主張もある⁵。このような柔軟な宗教が、弱弱しくなりつつもマヤの文化を長らえさせたといえよう。

こうした宗教的変容と同様に、マヤ文明が衰退したのではなく、滅びたという認識が広くあるのには、ここでもスペインが大きく関係する。まず、スペイン人宣教師が残した、「書き直された歴史」が原因の一つである。私たちはスペイン人宣教師の詳しい史料をもとにマヤの日常生活を知ることができている。だが、マヤはスペインの植民地であり、スペイン人神父ディエゴ・デ・ランダが16世紀に残した『ユカタン事物記』という権威ある史料でさえ「魂の征服」を徹底的に行ったランダの史料には、多くの主観的な見方、誤解や憶測も含まれている⁶のである。マヤ人たちさえも「……それぞれ都合よく改ざん・ねつ造した「歴史」をランダに伝えた」との青山の指摘にもあるように、それぞれ自分たちに都合のいい話を歴史として記録した結果、それらの史料は今日まで重要な史料として扱われていたのである。

突き詰めて言うと、「先住諸民族の歴史は周縁に置かれ、勝者であるスペイン人とその末裔の歴史が主流になった」のである⁷。このことこそマヤが消え去った文明、文化であるとの認識が流布する原因となったとの結論に至った。マヤ人は柔軟にスペインを受け入れ新たな社会を作り出したが、前述したとおりに、彼らの魂の征服までには至らなかった。このようにマヤ系先住民の抵抗は弱体化しながらも、1901年まで継続したのである⁸。マヤ人を含むインディオは度々反乱をおこした。「マヤ文明の崩壊」はこれらの反抗的なマヤ人への抑圧としての意味を含んだ表現のひとつなのではないだろうか。コンキスタドール達の目的のうちに、マヤ人たちがキリスト教へ改宗することがあったが、それは完全には成し遂げられなかった。またよく知られている通り、コンキスタドール達は特権階級であり、現地人の証である肌の色が濃いものほど差別される構造があった。征服の歴史を経ておきた差別は、現代にもまだ残る。

西洋中心の史観であるならば、歴史から薄れていったマヤは崩壊したといえるかもしれない。だが以上のことから、マヤ文明は崩壊した文明であるとの認識は、青山が「非先住民の為政者たちは、偉大なマヤ文明を国家・国民の誇りとして政治的に利用するいっぽうで、現代マヤ人を近代国家発展の障害とみなしたのである」としたように⁹、弾圧に耐え続けるインディオ、マヤ人の誇りであるマヤ文明への、スペインによる一種侮辱ともいえる帝国主義的な認識によるものであるといえるだろう。

文学部紀要』20(1)、(2013年)、73-108頁。

⁵ コウ、322頁。

⁶ 青山、308頁。

⁷ 青山和夫・猪俣健『メソアメリカの考古学』(同成社、1997年)、234頁。

⁸ 国本伊代『メキシコの歴史』(新評論、2002年)、186頁。

⁹ 青山、317頁。

【参考文献】

1. D・アダムソン、沢崎和子訳『マヤ文明 征服と探検の歴史』（法政大学出版局、1987年）
2. マイケル・D・コウ『古代マヤ文明』（創元社、2003年）
3. 青山和夫『古代マヤ 石器の都市文明』（京都大学学術出版会、2005年）
4. 青山和夫『古代メソアメリカ文明 マヤ・テオティワカン・アステカ』（講談社、2007年）
5. 青山和夫『マヤ文明 密林に栄えた石器文化』（岩波新書、2012年）
6. 青山和夫・猪俣健『メソアメリカの考古学』（同成社、1997年）
7. 国本伊代『メキシコの歴史』（新評論、2002年）
8. 中別府温和「メキシコ低地マヤ地域におけるカトリック的宗教文化統合の実証的研究 ——マヤ・ユカテカのカトリック村落マニの空間感覚分析のための序論的考察——」『宮崎公立大学人文学部紀要』20（1）、（2013年）、73-108頁。

A : 今年度、実際に参照したもの

1. D・アダムソン、沢崎和子訳『マヤ文明 征服と探検の歴史』（法政大学出版局、1987年）
2. カール・タウベ、藤田美砂子『アステカ・マヤの神話』（丸善ブックス、1996年）
3. マイケル・D・コウ『古代マヤ文明』（創元社、2003年）
4. マリア・ロンゲーナ『図説マヤ文字事典』創元社、2002年
5. 青山和夫・猪俣健『メソアメリカの考古学』（同成社、1997年）
6. 青山和夫『古代マヤ 石器の都市文明』（京都大学学術出版会、2005年）
7. 青山和夫『古代メソアメリカ文明 マヤ・テオティワカン・アステカ』（講談社、2007年）
8. 青山和夫『マヤ文明 密林に栄えた石器文化』（岩波新書、2012年）
9. 国本伊代『メキシコの歴史』（新評論、2002年）
10. 中別府温和「メキシコ低地マヤ地域におけるカトリック的宗教文化統合の実証的研究 ——マヤ・ユカテカのカトリック村落マニの空間感覚分析のための序論的考察——」『宮崎公立大学人文学部紀要』20（1）、（2013年）、73-108頁。
11. 中村誠『マヤ文明はなぜ滅んだか？ ——よみがえる古代都市興亡の歴史』（ニュートンプレス、1999年）

B : 今後参照予定のもの

1. A・レシーノス『マヤ神話 ポポル・ヴフ』（中公文庫 BIBLIO、2001年）
2. 国本伊代『改訂新版 概説ラテンアメリカ史』（新評論、2001年）

創り上げられたヒトラーの人氣

寺門 侑樹

アドルフ・ヒトラーは、オーストリア出身の世界大戦期に活躍したドイツの政治家として有名であり、知らぬ者はいないくらいだろう。ヒトラーと聞いて私たちが思い浮かべるのは、人類の歴史上もっとも残酷で卑劣なナチス・ドイツの独裁者としての姿であろう。実際に彼は徹底的人種主義思想に基づき、血統的に優秀なドイツ人が最も栄え世界を支配すべきであると主張し、ユダヤ人など異人種を強制収容所に送り大量虐殺を行った。しかし、当時多くのドイツ国民はこのヒトラーを支持していた。現代では極悪非道の限りを尽くした男とのイメージが持たれている中、なぜ当時のドイツ国民は彼を英雄として崇め支持していたのだろうか。「ヒトラーの権力は、きわめて複雑な問題をわれわれに投げかけている。『ヒトラーはいかにして可能だったか』という問いは、すでに同時代のナチの敵対者の心を捉えていたし、後世の歴史家を悩まし続けている」とイギリスの歴史家イアン・カーショールも同等の疑問を示している¹。本論ではこの大きな疑問について考察していく。

まず初めに、私はヒトラーの絶大な人氣は彼一人の力で実現されたものではなく、それを陰で支え、作り上げた人びとがいたからこそ成しえたものと仮定した。時を遡り、ドイツが第一次世界大戦に敗れた1919年、連合国との間に結ばれたヴェルサイユ条約でドイツは1320億金マルクもの高額な賠償金を科せられた。戦争で疲弊、困窮しきったドイツにはあまりにも重すぎるものだった。更に追い打ちをかけるかの如く、1929年には世界恐慌が起きた。世界の資本主義国が大ダメージを負う中、ドイツ国内も3人に1人が失業者という状況で、街は浮浪者で溢れかえっていた。ここで登場したのがヒトラーである。彼は強引ながらも国内の公共事業の充実やアウトバーンの建設などを行い、政治的辣腕を振るいながら瞬く間にドイツ経済を回復させていった。しかしながら、ヒトラーは昔から天才的な政治家になることを予想されていたのかといえば、必ずしもそうではない。彼は生まれはドイツではなくオーストリアであり、中下層の家庭に生まれたごく普通の少年であった。そして18歳の時に芸術学校のウィーン芸術アカデミーを受験している。ヒトラーはこの頃までは全く政治家など志してなどいなかった。オーストリア陸軍の兵役を逃れるためにミュンヘンへと逃亡し、バイエルン軍の兵士へと志願したことで、彼は軍人としての道を歩みだすことになる。第一次世界大戦時も彼は従軍し、戦場へと出向いていた。

ナチ党はドイツ労働者党が1920年に改称したもので、支持する人々の基盤は最初は既存の政党、労組に不満を持つ中間層や失業者が中心であった。だが社会主義運動に脅威を感じた経営者団体の援助によって、ナチは豊かな資金のもと大幅な宣伝活動を展開し始め、選挙によって政権を奪取することを目指すまでに至った。そして1932年の選挙でナチ党は第一党となり、

¹ イアン・カーショール、石田勇治訳『ヒトラー権力の本質』（白水社、2009年）、15頁。

翌年にはヒトラーは首相へと任命され、ナチ党の一党支配への道が徐々に開かれ始めていった。こうして誕生したヒトラーを筆頭とする新政府は 1933 年 2 月の国会議事堂放火事件を機に共産党などの左翼勢力を弾圧し、政治的圧力を強めた。翌 3 月には全権委任法を制定し、国会が有していた立法権を政府に移して、ワイマール憲法を破棄し、さらにナチ党以外の政党や労働組合を解散させた。こうしてナチ党のドイツ一党独裁体制が築かれた。ナチ党の支配下の下では基本的人権は無視され、教育や文化を含む社会のあらゆる領域が厳しく統制されていた。ここで言及しなければならないのが秘密警察ゲシュタポの存在である。ゲシュタポの隊員は人びとの生活の中に潜んでいて、諜報活動、スパイ活動を行っていた。彼らの任務は国家の敵となる反逆者たちを炙り出すことであり、ナチ党に対してほんの些細な反対意思を示しても犯罪者とすることができた。彼らが自分のすぐ近くにいるかもしれないという恐怖を国民に植え付けたことは、ヒトラーが独裁を形成していく上で大きな効果をもたらした。互いが互いを見張るような環境は常に緊張をもたらし、ナチスに対する反逆的活動を抑え込むには充分であった。

また、ヒトラーの政治を支えた数々の優秀な部下たちの存在も、彼の絶大な人気を創り出した大きな要因の一つであろう。ナチ党官房長官でヒトラーの黒幕とまで称されたマルティン・ホルマン、親衛隊 (SS) 全国指導者のハインドリヒ・ヒムラー、そして多く特筆されるのがラインハルト・ハイドリヒである。彼はベーメン・メーレンの総督、ホロコーストの総括責任者、保安諜報部、ゲシュタポすべてを統括するヒトラーの全能なる部下であり、「鉄の心臓をもつ男」とヒトラーから称賛されていた。しかし、当初ヒトラーから絶大な信頼をかっていたヒムラーでさえも、戦争末期にはヒトラーを裏切り、英米と個別的に講和を結ぼうとしたかどで指導権を剥奪されたのである。

ヒトラーはなぜ人びとの支持を大きく獲得することができたのか。ここで重要なのはカリスマ的指導者となった彼が大衆に訴える力は、彼の実際の個性と性格とは直接関係しないということだ。ここでいう個性と性格とは、彼の持つ徹底的人種主義思想などの残虐な一面を指す。しかし、実際の彼がどうであったかよりも、人びとがどう感じ取るかが重要であった。1932 年の国会選挙でヒトラーに投票した 1300 万人のうち、彼に会ったことのある人はほとんどいなかった。彼らが耳にしたり、新聞で読んだり、選挙集会や大衆集会で見たり聞いたりしていたヒトラーの人物像は宣伝によって作り上げられ、完全に塗り替えられたイメージを、まるでヒトラー本人であるかのように人びとは抱いていたのである。

大衆宣伝がもたらした国民のヒトラー支持の恩恵は絶大であった。このナチスの宣伝術、プロパガンダに大きな貢献をしたのがパウル・ヨーゼフ・ゲッベルスだ。彼は国家社会主義ドイツ労働者党の第 3 代全国宣伝指導者、兼初代宣伝大臣としての役職を務めて、ヒトラー人気を作り上げる上で大きな役割を果たした。彼はナチスの宣伝ポスターのデザインにとっても拘った。彼が党の宣伝の仕事に任されるまでは予算の問題で、宣伝のポスターやチラシは黒一色であった。だが彼は、借金をしてまでも刺激的で、人びとの目を引き付けるような赤字印刷の入ったポスターを作成したのだ。

それと同時に、作られたイメージを受け入れる態度が人びとの間に初めからあったことも同時に重要である。ナチを支持した大部分の人びとは、ヒトラーの生き生きとした姿を目にしたがり、そのカリスマぶりに屈服する以前から、ヒトラーのどこかに魅力を感じていたのではない。ドイツ史家の田中晶子は「演説内容は別としても、ヒトラーの演説の仕方、彼の政治的直

感、判断力、決断力という彼自身のもつ特殊な能力が、民衆やナチ党員を魅了した。これらはプロパガンダにより創り上げられた虚像ではなく、ある程度はヒトラーの実像に相応したものであった」と述べている²。ヒトラーの人気は確かに宣伝術によって支えられた部分は大きいだろう。しかし、彼は国民を一つにまとめ上げる独裁者としての天才的、カリスマ的力も持っていたに違いない。実際に彼は選挙という合法的手段によって、その位を上げてきたのだから。

人道的に善いことをしたとは決して言えないヒトラーが、なぜこうにも国民の支持を大きく獲得することができたのか。敗戦後絶望の淵に立たされていたドイツ経済を立て直し、私についてこいと言わんばかりに強引にもドイツを引っ張る彼の姿は、当時のドイツ人には英雄的存在に見えたのだろう。しかしそれ以上に、国民の中にヒトラーという英雄的独裁者のイメージを植え付けた巧みな宣伝術、彼を傍で支えた優秀な部下、そしてナチスの独裁体制を崩させないように敷いた数々の政治的工夫（本論でとりあげたゲシュタポ）など、彼自身の政治的才能があったからこそ、ヒトラーはひとびとの中で英雄になることを実現できたのである。

【参考文献】

1. ゲッツ・アリー、芝健介訳『ヒトラーの国民国家』（岩波新書、2012年）
2. イアン・カーショー、石田勇治訳『ヒトラー権力の本質』（白水社、2009年）
3. グイド・クノップ、高木玲訳『ヒトラーの親衛隊』（原書房、2003年）
4. ロバート・ジェラテリー、根岸隆夫訳『ヒトラーを支持したドイツ国民』（みすず書房、2008年）
5. 田中晶子「ヒトラー崇拜」『愛知県立大学大学院国際文化研究論集』第10号（2009年）、207-234頁。

² 田中晶子「ヒトラー崇拜」『愛知県立大学大学院国際文化研究論集』第10号（2009年）、229-230頁。

A : 今年度、実際に参照したもの

1. ゲッツ・アリー、芝健訳『ヒトラーの国民国家』（岩波新書、2012年）
2. イアン・カーショー、石田勇治訳『ヒトラー権力の本質』（白水社、2009年）
3. ガイド・クノップ、高木玲訳『ヒトラーの親衛隊』（原書房、2003年）
4. ロバート・ジェラテリー、根岸隆夫訳『ヒトラーを支持したドイツ国民』（みすず書房、2008年）
5. 田中晶子「ヒトラー崇拜」『愛知県立大学大学院国際文化研究論集』第10号（2009年）、207-234頁。

B : 今後参照予定のもの

1. ガイ・ウォルターズ、高儀進訳『ナチ戦争犯罪人を追え』（白水社、2012年）
2. イアン・カーショー、柴田敬二訳『ヒトラー神話』（刀水書房、1993年）
3. ルイス・スナイダー、永井淳訳『アドルフ・ヒトラー』（角川書店、1998年）
4. 佐藤卓巳『大衆宣伝の神話』（弘文堂、1994年）
5. 宮田光雄『ナチ・ドイツの精神構造』（岩波書店、2002年）
6. 村瀬興雄『ナチス統治下の民衆生活』（東京大学出版会、1983年）

ビザンツ帝国が欧州世界で果たした歴史的役割

藤根 琢也

ドイツの思想家、カール＝マルクスはビザンツ帝国を「最悪の国家」と呼んだ¹。近現代歴史家のビザンツ帝国への評価は軒並み低いものである。またドイツ語のbyzantinischには追従、卑屈の意味があり、英語、フランス語の「ビザンツ」を意味する単語にも同様にネガティブな印象が投影されている²。このように、ビザンツ帝国は否定的なイメージで語られることが多く、現在にも狡猾でずるがしこい印象が言い伝えられている。しかし、同帝国は地理的、民族的にも不安定な条件のもとにあったのにも関わらず、千年以上存続し続け、中世欧州においても他の諸国家には未だ見られにくかった都市を中心とした社会、貿易の恩恵による民の豊かさ等の異質なものを持ち、羨望の眼差しを注がれていた。歴史的には軽視されがちではあるが、千年帝国を実現させたビザンツ帝国が歴史の上で果たした役割はいかなるものであるのだろうか。本レポートではビザンツ帝国が果たした歴史的役割、すなわち [1] 東欧世界を形成したこと [2] 欧州世界でのイスラーム勢力への防波堤の役割を果たしたこと [3] ギリシャ・ローマの文化、精神を西欧に伝えて同地にてルネサンスを引き起こした [4] ビザンツ帝国の滅亡が欧州世界の転換とその近世を導いたこと、以上のことを明らかにする。したがってビザンツ帝国が歴史に必要とされた意味を確認するために本論では、キリスト教、帝国の強靱さ、文化と精神、欧州と近世の確立等について触れて帝国の歴史的役割を明らかにしていく。

まずビザンツ帝国が東欧社会を形成するに至った経緯を宗教とローマ帝国の概念の二つの理由から、その宗教的状況を分析する。ビザンツ帝国はキリスト教を政治的なイデオロギーとしてうたっていた。中世欧州ではキリスト教が絶大で唯一的な力を誇っており、ビザンツ帝国もその例外ではなかった。ところが他国家がローマの総主教をキリスト教指導者として絶対視していたのに対し、ビザンツ帝国では首都コンスタンティノープルの総主教がキリスト教の頂点であった。このために時代が進むにつれ両者の教義は次第に異なるものとなり、ビザンツ帝国はローマの総主教に対抗するような勢力を築くことになった。この過程で、その頃北方から侵入していたスラヴ系民族にも布教を開始した³。その結果、ビザンツ帝国は文化が未熟で野蛮とされる彼らを啓蒙することでバルカン半島内、そしてバルカン半島の北または東に今日の東欧と呼ばれる概念を東方正教によって生み出すことに成功した。対してローマ教皇は教皇を中心とする西欧社会を生み出すことになった。すなわち、宗教的対立によって帝国は欧州を東欧と西欧に分断したのだ。さらにビザンツ帝国は自らをローマ帝国の正統な継承者であると誇っており、自分たちこそが世界の中心と信じていた。確かにビザンツ帝国は 11 世紀のおわりま

¹ 井上浩一『生き残った帝国ビザンティン』（講談社、2008年）、59頁。

² 井上浩一『ビザンツ 文明の継承と変容』（京都大学学術出版会、2009年）、25頁。

³ C・ドーソン、野口啓祐ほか訳『ヨーロッパの形成：ヨーロッパ統一史叙説』（創文社、1988年）、203頁。

では西欧を凌ぐ国力を保持しており、首都コンスタンティノープルは「世界の富の三分の二が集まるところ」とうたわれるほどであった。だが、帝国の傲慢な態度と豊かさは西欧社会に反感と劣等感を抱かせていた⁴。800年のローマ教皇のカルル戴冠による西ローマ帝国復活もビザンツに対する劣等感の克服を試みた事件とうかがえる。これらのことも西欧と東欧の溝をさらに深め、欧州をさらに違った文化や習慣に分断する原因になった。中世欧州とは教皇の西欧とビザンツによる東欧の時代とも言えるのだ。

次に帝国の軍事的、宗教的強靱さについて説明して、イスラームの防波堤となった帝国の役割を考える。上で述べたようにキリスト教はビザンツ帝国の核であり、非常時には人々の心をまとめ、精神の支えになった。西欧では教皇が持つ教皇領の周りを諸王国が守る体制が形成されていたが、ビザンツでは宗教の元首が帝国そのものであり、帝国は西欧の教皇領に相当した。歴史的に見ても、このようなシステムは西洋にはなく、東洋ではイスラームしか存在していない。ビザンツはイスラームと接触し、彼らに宗教の凄味、誠実さを見せられることで信仰心をより強くした。このようにしてイスラーム宗教帝国の強さを目の当たりにしたことも、ビザンツを宗教帝国として発展させ強靱にした理由のひとつであろう。帝国の強さの理由はもう一つある。それは帝国が戦争を必要悪と見なしていたことである⁵。したがって帝国は戦争を嫌う傾向にあり、戦いに際して防衛に主軸を置いた。これは西欧の十字軍のようなものとは異なる戦争概念である。首都コンスタンティノープルは6kmにわたる強固な城壁を有し、さらに帝国内部にはテマと呼ばれる軍事行政区画を設置し、常に敵の侵入を防御しようとしていた⁶。他にも外交によって戦争を避けようとしていた。このように、宗教帝国という特質を利用しながら、イスラーム勢力の欧州への侵入を千年以上防いできた。このように、ビザンツ帝国がアジアと欧州の間の防波堤となり、イスラームの脅威から欧州を防ぎきれなければ、現在のようなヨーロッパの版図は存在していないに違いない。歴史学者であるアンリ・ピレンヌは「マホメットなしにシャルルマーニュなし」と述べている⁷。これは勃興したイスラーム勢力に西欧社会が刺激されて封建社会が生まれたことを指した言葉であるがビザンツも物理的にイスラームを防いだことで欧州社会の形成に一役買っていると言える。

ビザンツ帝国の宗教的、軍事的強靱を見てきたが、文化面では帝国はいかなる展開をみせていたのだろう。ここではビザンツの文化、精神について着目し、それらが西欧にもたらしたルネサンスに関して論ずる。ビザンツ帝国は小アジア、バルカン半島といった東地中海沿岸を治めた帝国であった。特にそのなかでも帝国はバルカン半島内に欧州の源流であるギリシャを治めていた。このことから帝国は高い水準の文化と精神を獲得していた。帝国内ではプラトン等の哲学者の思想、イリアスなどの文芸作品、モザイク画に代表される芸術が普及していた。これらはローマ帝国が東西に分かれてから西欧では徐々に失われてしまっていたものであった。一方、東欧ではこれらの文化を多彩な文化と混合して独自の文化を生み出すことに成功した⁸。

4 井上、『ビザンツ 文明の継承と変容』、16-24 頁。

5 井上、『ビザンツ 文明の継承と変容』、283-285 頁。

6 小林功「7世紀のテマと小アジア ——ビザンツ国家の再生（特集 変容する「軍隊」「戦争」像—— 帝国・国家・地域社会と武装する民衆（1））」『歴史学研究』（2011年）、2-11 頁。

7 ピーター・ブラウン、後藤篤子訳『古代から中世へ』（山川出版社、2006年）、71-74 頁。

8 ドーソン、140 頁。

そして西欧とは異なる気質の文化を形成しつつ、古来の文化を保存していった。また、ビザンツ帝国は表現の自由な国家であった⁹。その結果として人々は批判精神を大切にして豊かな精神を醸成していった。ビザンツの文化が西欧に拡散し、広く浸透するのは1204年に第四回十字軍でビザンツ帝国が一時滅亡したときであった。都市の女王であり、帝国の本質が凝縮されていたコンスタンティノープルを十字軍は攻め落とした。これにより帝国の略奪品が流れ、西欧の人々の心を感化した。他にも14世紀になってオスマン＝トルコの領内侵攻によりビザンツ帝国が衰退し滅ぶと、その際に侵攻された地域の人々が西欧に流入し、ビザンツの文化が西欧に拡散したのだ。これはのちに欧州で起こるルネサンスの嚆矢になったと考えられる。西欧でのゲルマン風の文化にギリシャ、ローマの文化を混合することで新たな精神の可能性を西欧は見出すことができた。文化の質が良いものならばそれを持つ者の精神はよりよいものになる。このように、ビザンツの衰退は西欧におけるルネサンスのはじまりを引き起こす役割を果たし、失われていたギリシャ・ローマ文化を守り続け、それらを醸成させて西欧に伝えたのである。

これまでビザンツについて諸々の特徴と考察をしてきた。最後に視点をマクロにして欧州世界の転換と近世のはじまりをビザンツ帝国と関連させて説明する。800年のカール戴冠は西欧と東欧を誕生させた。このことは欧州世界を誕生させたが、変化させるにはいたらしめなかった。欧州世界が変化し始めるのは13～15世紀である。13～15世紀はオスマン＝トルコのビザンツ帝国侵入によって東欧と西欧の境界が曖昧になり始めた時期であった。ビザンツ帝国が防波堤としての役割を失いはじめ、14、15世紀にはバルカン半島のほとんどをオスマン＝トルコが征服してしまった。結果として、西欧とイスラームがバルカン半島で接する事態が発生した。東欧世界は形を失い、防波堤を喪失した西欧はイスラーム勢力に対してかつてない危機感を抱き始めたのだ。このようにイスラームと接することで西欧は自分たちが欧州人であるとはっきりと自覚するようになった。というのも、欧州一丸となってイスラームに対抗せねばならないと強く考えるに至ったからである。そしてビザンツ帝国がオスマン＝トルコに滅ぼされたことで欧州世界は変化した。防波堤は消え去ったのだ。また、ビザンツ帝国が滅亡したことは中世の終わりを意味した。オスマン＝トルコの侵攻に際して、ヨハネス5世が西欧の援助を求めたためにカトリックに改宗してしまったことや、1439年のローマ教会との東西教会の合同は、西欧社会に大きな動揺を与えた。ビザンツ帝国は東方教会そのものであったからだ。東欧の宗教帝国の瓦解は西欧に多大な影響を与えた。このことは宗教の力を人々が疑い始めた端緒になり、宗教が次第に欧州で力を失っていく欧州社会での中世から近世への転換を助長している。そして西欧の人々はイスラームに必死で対抗するためにのちの科学の発展や大航海時代のような近世の変革を起こしていくのだ。かくしてビザンツ帝国の滅亡は欧州を転換させ、近世の幕を開けたのであった。

ここまで四つのビザンツ帝国の歴史的役割を見てきた。[1] 宗教の対立によって東欧社会または文化を形成した。[2] イスラームの脅威から欧州を守っていた。[3] ギリシャ・ローマの文化、精神を西欧に伝えてルネサンスを引き起こした。[4] ビザンツ帝国の滅亡によって欧州世界が変化し、さらに近世へと欧州を導いた。このように見てわかる通り、ビザンツは西洋史

⁹ ジュディス・ヘリン、足立広明ほか訳『ビザンツ 驚くべき中世帝国』（白水社、2010年）、162-175頁。

学的に欧州で中心的な位置を占めていたのである。

【参考文献】

1. クロード・カーエン、渡辺金一編、加藤博訳『比較社会経済史：イスラム・ビザンツ・西ヨーロッパ』（創文社、1988年）
2. C・ドーソン、野口啓祐ほか訳『ヨーロッパの形成：ヨーロッパ統一史叙説』（創文社、1988年）
3. ピーター・ブラウン、後藤篤子訳『古代から中世へ』（山川出版社、2006年）
4. ジュディス・ヘリン、足立広明ほか訳『ビザンツ 驚くべき中世帝国』（白水社、2010年）
5. 井上浩一『生き残った帝国ビザンティン』（講談社、2008年）
6. 井上浩一『ビザンツ 文明の継承と変容』（京都大学学術出版会、2009年）
7. 小林功「7世紀のテマと小アジア——ビザンツ国家の再生（特集 変容する「軍隊」「戦争」像—— 帝国・国家・地域社会と武装する民衆（1）」『歴史学研究』（2011年）、2-11頁。
8. 鳥山成人『ビザンツと東欧世界』（講談社、1978年）
9. 根津由喜夫『ビザンツの国家と社会』（世界史リブレット、2008年）

A：今年度、実際に参照したもの

1. クロード・カーエン、渡辺金一編、加藤博訳『比較社会経済史：イスラム・ビザンツ・西ヨーロッパ』（創文社、1988年）
2. C・ドーン、野口啓祐ほか訳『ヨーロッパの形成：ヨーロッパ統一史叙説』（創文社、1988年）
3. ピーター・ブラウン、後藤篤子訳『古代から中世へ』（山川出版社、2006年）
4. ジュディス・ヘリン、足立広明ほか訳『ビザンツ 驚くべき中世帝国』（白水社、2010年）
5. 井上浩一『生き残った帝国ビザンティン』（講談社、2008年）
6. 井上浩一『ビザンツ、文明の継承と変容』（京都大学学術出版会、2009年）
7. 小林功「7世紀のテマと小アジア——ビザンツ国家の再生（特集 変容する「軍隊」「戦争」像—— 帝国・国家・地域社会と武装する民衆（1）」『歴史学研究』（2011年）、2-11頁。
8. 鳥山成人『ビザンツと東欧世界』（講談社、1978年）
9. 根津由喜夫『ビザンツの国家と社会』（世界史リブレット、2008年）

B：今後、参照予定のもの

1. H・G・ベック、渡辺金一訳『ビザンツ世界の思考構造：文学創造の根底にあるもの』（岩波書店、1978年）
2. J・M・ロバーツ、月森左知訳『ビザンツ帝国とイスラーム文明』（創元社、2003年）
3. 井上浩一、栗生沢猛夫『ビザンツとスラヴ』（中央公論社、1998年）
4. 鳥山成人『ビザンツと東欧世界』（講談社、1978年）
5. 根津由喜夫『ビザンツ貴族と皇帝政権：コムネノス朝支配体制の成立過程』（世界思想社、2012年）
6. 橋口倫介『中世のコンスタンティノーブル』（講談社学術文庫、1995年）

このレポート集をお読み頂いた方に

このレポート集は、明治大学文学部史学地理専攻の基礎演習（西洋史）金澤クラスの学習成果（2013年度）である。13名の受講生は、それぞれ各個人の関心や意識を反映させつつ、地道な学習とリサーチを重ね、レポートを完成させた。

担当講師は基礎演習の目的を、各個人の学究的な思考様式の会得や、リサーチおよびプレゼンテーション技術の向上など、インプット・アウトプットそれぞれの技術修得に置いた。一番の難問は、高校までの範囲学習や暗記主体の学習の価値観をいかに脱して、かつ大学や社会における文学部の学生らしい思考様式を身につけるかにあった。受講生と担当講師が双務的に緊張感を持ってこの目的に取り組んできたか否かは、各受講生にもう一度考えて貰いたい。

大学一年次は非常に伸びしろの大きな時期であると同時に、高校から大学での教育の変化という「壁」にもがき、悪戦苦闘する時期でもある。すべての受講生が成長したとも言えるし、また同時にこの壁を乗り越えられていないとも言える。レポートにはその側面が如実に表れている。しかし、こうした壁やハードルを意識することで、新たな大学での学習目的を持ってよう。今後の受講生の学びと成長に担当講師は期待している。

.

このレポート集は専門ゼミのなかで記述されたものではない。また、大学初年度教育の中で生み出されたものである。したがって、ここに掲載した学生のレポートには、文章や論理構成がこなれていないところや、解釈・分析上の間違いもあろう。しかし、それは学生の資質の問題ではなく、担当した講師の力量に還元される問題である。すべての責は担当講師金澤宏明が負うものである。同時に、各学生はこうしたステップを踏んで、次の段階へと成長していくことをご理解頂きたい。

担当講師 金澤宏明
(明治大学 文学部 兼任講師)

【奥付】

2014年1月20日発行

明治大学 文学部 基礎演習（西洋史）2013年度 金澤クラス